信州大学医学部保健学科
平成 26 年度
夏期海外研修プログラム実施報告書

2014

平成 26 年 11 月 25 日
信州大学医学部保健学科

信州大学医学部保健学科
平成 26 年度夏期海外研修プログラム実施報告書
編集：信州大学医学部保健学科　国際交流委員会

委員長　：奥野　ひろみ　（看護学専攻）
委　員　：大平　雅美　（理学療法学専攻）
Ah-Cheng GOH　（理学療法学専攻）
相良　淳二　（検査技術科学専攻）
日高　宏哉　（検査技術科学専攻）
佐々木　努　（作業療法学専攻）
山崎　浩司　（看護学専攻）
山﨑　明美　（看護学専攻）
事務部　：中島　華　（学務第二）
川舩　圭介　（学務第二）

Ⅰ．学術交流にあたって　・・・・・１
　１．学科長のことば
　２．同窓会長のことば

Ⅱ．学術交流の概要　・・・・・３

Ⅲ．信州大学医学部保健学科の国際交流プログラム概要　・・・・・６

Ⅳ．信州大学-Curtin University
　大学間学術交流協定に基づく夏期海外単位認定プログラム　・・・・・８
　１．カーティン大学の概要　・・・・・９
　２．夏期海外単位認定プログラム　・・・・１０
　３．研修プログラム詳細　・・・・１５
　４．学生アンケート　・・・・２１
　５．学生レポート　・・・・２８

Ⅴ．信州大学―ネパール
　夏期海外研修保健医療スタディツアープログラム　・・・・３８
　１．ネパール連邦民主共和国の概要　・・・・３９
　２．保健医療スタディツアープログラムの概要　・・・・４０
　３．研修プログラムの詳細　・・・・４１
　４．学生アンケート　・・・・４５
　５．学生レポート　・・・・４９

Ⅵ．信州大学―シンガポール
　夏期海外研修保健医療スタディツアープログラム　・・・・５４
　１．シンガポール国の概要　・・・・５５
　２．保健医療スタディツアープログラムの概要　・・・・５６
　３．研修プログラムの詳細　・・・・５７
　４．学生アンケート　・・・・６３
　５．学生レポート　・・・・６９

（編集後記に代えて）

Ⅰ．学術交流にあたって

１．学科長のことば

信州大学医学部保健学科長　金井　誠

保健学科長
金井 誠

信州大学医学部保健学科では、国際交流委員会が中心となって、学術・教育面での国際交流推進に向けて取り組んでおり、本年度は３つの夏期海外研修プログラムを実施しました。Australia Curtin University 夏期海外単位認定プログラムには看護学専攻５名、検査技術科学専攻６名、理学療法学専攻２名、作業療法学専攻４名の計 17 名の学生が、Singapore General Hospital PTE LTD（Sing Health）保健医療スタディプログラムには看護学専攻４名、検査技術科学専攻３名の計７名の学生が、Nepal 保健医療スタディプログラムには看護学専攻４名、理学療法学専攻１名の計５名の学生が参加し､総計で 29 名の学生が短期海外留学を経験いたしました。

帰国後のアンケートをみますと、参加者の殆どが、多くの刺激を受けて充実した短期留学を終えたことが窺えます。この体験で得た感性や知識が今後の学生生活、社会人生活に有意義に働くよう期待しています。また昨年同様に本年度も海外より教員をお招きし、オープンミーティング等の開催を計画しています。本プログラム参加者だけでなく、大学院生を含めた多くの学生に参加していただき、交流を深めていただきたいと思います。

本プログラムの運営には、カーティン大学をはじめとする留学先との事前交渉、プログラムの作成、学生へのプログラムの紹介、航空券の確保と準備、支援金の確保、渡航中の学生の安全確保等のために多くの教職員が関わっています。また帯同教員不在中は学部の秋期に向けての準備時期にあたるため、在松の教職員の協力が不可欠です。関係した教職員の方々にこの場をお借りし感謝いたします。

また本年度も参加学生に対しては、日本学生支援機構の海外留学支援制度（短期派遣）の採択を受けての援助をいただくとともに、本学からも「知の森基金を活用したグローバル　人材育成の為の学生への短期海外活動支援」、「信州大学知の森未来プロジェクト」より、参加学生および本プロジェクトに帯同する教員の渡航費用の一部等にご援助をいただきました。加えて　同窓会の基金からもご援助いただきました。ご配慮くださいました信州大学本部役員の皆様ならびに信州大学医学部保健学科同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

２．同窓会はこれからも夏期海外研修プログラムを応援していきます！

保健学科同窓会長　川上由行

今年２０１４年度も夏期海外研修プログラムが実施され、３週間のプログラムを滞りなく終了することができました。今年度は、西オーストラリア州パースにあるカーティン大学における研修以外に、ネパールにおける研修や、シンガポールにおける研修も併せて企画されました。そして、順調に全ての日程プログラムを滞りなく遂行することができ、参加学生と帯同教員の全員が、元気で帰国することができました。

慣れない英語圏での日々でしたが、学生たちにとっては、刺激的で忘れられない3週間だったと思います。西オーストラリアのパースでのCurtin-Lifeを、また、ネパールでのＮＰＯ等の見学と健康教育の実施や、さらには、シンガポールでの Singapore General Hospital を中心とする見学研修等々の、研修プログラムを充分に満喫された学生さんは、掛け替えのない日々を過ごし、そして、多くの触発される体験をされたのではないかと思います。そしてこのプロジェクトの円滑運営に対して労力を惜しまずに支援された国際交流委員会の教員各位、そして事故もなく実際に引率された教員各位には、本当にお疲れさまでした。

国際的には、エボラ出血熱の感染拡大が大きなニュースとして世界中を駆け巡り、また日本国内では、代々木公園でヒトスジシマ蚊に刺されて発症したのを契機にデング熱の感染が連日のように報道される中での帰国になりましたが、特にデング熱に対しての注意喚起を、帰国に際しての学生に徹底するなどの配慮をされたとお聞きし、帯同教員のきめ細かな学生への対応にも敬意を表したいと思います。

本プロジェクトは発足以来、着実に成果を上げて来ているのを実感してきております。今後は国際交流委員会と更に緊密に連携しあって、教員相互間の学術交流、また本保健学科学生、また保健学専攻大学院生とカーティン大学の学生相互間での有効的な交流へと進展して行くことを祈念しつつ、保健学科同窓会は、この夏期海外研修プログラムを応援して行きたいと思います。建設的な意見　交換の中でこの素晴らしい夏期海外研修プログラムがより一層の輝きを増して進展していくことを　信じております。

Ⅱ．学術交流の概要

１．学術交流協定および学生の交流に関する覚書締結の経緯とカーティン大学交流実績

1) 1992 年 8 月、イギリス、ロンドンで開催された第１１回世界理学療法連盟学術集会に出席した信州大学医療技術短期大学部藤原孝之教授（現 郡山健康科学専門学校/東都国際ビジネス専門学校 理事・学校長）と、カーティン大学健康科学部ジョン・コール教授との間で教育・研究に関する情報交換が始まった。
2) 1997 年 3 月、藤原孝之教授、楊箸隆哉教授（当時）およびゴウ・アー・チェン助手（現准教授）の 3 名が、カーティン工科大学副学長宛の本学学長親書を携え、健康科学部の遠隔地教育システムに関する資料収集、共同研究課題の打ち合わせを目的としてカーティン工科大学を訪問した。カーティン工科大学学長、健康科学部長、看護学科、医学検査学科、理学療法学科、作業療法学科等のスタッフとの会談の折り、両大学間の、より積極的な学術交流が話題となり、教員、学生交流の早期実現に向け検討することで合意した。
3) 1998 年 7 月−8 月、藤原孝之教授が文部省在外研究員派遣でカーティン工科大学健康科学部理学療法学科客員教授として滞在した折り、カーティン工科大学健康科学部スタッフミーティングに出席し、当該大学の多くの教官より大学間交流に関する質問を受け、同大学が信州大学との大学間学術交流に興味を示していることがわかった。
4) 1999 年 3 月、本学藤原孝之、楊箸隆哉両教授がオーストラリアに出張した際、副学長ジョン・ミルトン−スミス教授、健康科学部長チャールズ・ワトソン教授、看護学科主任教授マイケル・ヘイゼルトン、理学療法学科主任教授ジョン・コール、国際教育課程担当パメラ・ロバーツ女史等と両大学間の学術交流推進を話題に会談した。両大学の資料を交換し検討した結果、単一学部間に留まらず、広い学際領域での学術交流を目指すことを目標にすることで合意した。その際、カーティン工科大学副学長から大学間協定に関する雛形文書を預かった。
5) 1999 年 4 月、学術交流協定を締結した。
6) 1999 年 5 月、横浜で開催された第 13 回世界理学療法連盟学術集会に特別講演演者として来日したジョン・コール教授が、信州大学を表敬訪問し特別講義を行った。
7) 2000 年 8 月、学術交流協定に基づく学生の交流に関する協定書を締結。同 9 月、宮坂敏夫教授（短期大学部長）以下教官、学生 20 名がカーティン工科大学を表敬訪問し、各学局の国際交流担当者と短期留学の可能性を協議した。帰国後、部長のもとに 5 名からなるチームを置き、プログラムの実施計画を作成した。
8) 2001 年 8 月、信州大学医療技術短期大学部学生 32 名がカーティン工科大学にて第 1 回夏季留学・単位認定プログラムに参加した。
9) 2002 年（第 2 回）は 27 名、2003 年（第 3 回）は 24 名、2004 年（第 4 回）は 20 名、2005 年（第 5 回）は 29 名、 2006 年（第 6 回）は 28 名、2007 年（第 7 回）は 15 名および信大附属病院看護師 2 名、2008 年（第 8 回）は 31 名（内大学院生 2 名）、2010 年（第 9 回）は 19 名、 2011 年（第 10 回 17 名）2012 年（第 12 回）22 名、2013 年（１３回）21 名が夏期海外研修プログラムに参加した。

10）カーティン教員招聘：2007 年 1～2 月、国際教育課程ディレクター パメラ・ロバーツ、2010 年 1 月、Nursing school 講師アラン・トルク。2013 年 1 月、Biomedical Sciences 学部 Dr マーティン。

２．学術交流協定および教員と学生の交流に関する協定書の更新

1999 年 4 月に締結された学術交流協定および 2000 年 8 月に締結された学術交流協定に基づく学生の交流に関する協定書は、2004 年 4 月に信州大学とカーティン工科大学の間で、「学術交流協定」および「学術交流協定に基づく教員と学生の交流に関する協定書」として更新され、2009 年には信州大学国際交流センターを窓口とした大学間協定となり、夏期研修プログラムとカーティン教員招へいが医学部保健学科とカーティン大学英語センター（Curtin English Language Center, CELC）・健康科学部により企画・実施され、両校の交流は一層親密に深められることになった。また、本協定に基づき、信州大学はカーティン大学から短期留学生（学部）を受け入れている。

教員と学生の交流に関する協定書（2009.9 Curtin University of Technology）

STAFF AND STUDENT
EXCHANGE AGREEMENT

Between

CURTIN UNIVERSITY OF TECHNOLOGY,
PERTH, WESTERN AUSTRALIA
Through its Faculties of Health Sciences and Humanities

And

SHINSHU UNIVERSITY,
NAGANO, JAPAN

Curtin University of Technology (hereinafter referred to as 'CURTIN') and Shinshu University (hereinafter referred to as 'SHINSHU') agree to the following terms:

DEFINITIONS

In this Agreement, unless the context will otherwise imply:

HOME institution means the institution at which the student intends to graduate; HOST institution means the institution that has agreed to receive students from the HOME institution.

ACADEMIC YEAR in the context of CURTIN means two semesters, from February to June (Semester 1) and July to November (Semester 2); and in the context of SHINSHU means April to August (Semester 1) and October to February (Semester 2).

ACADEMIC STAFF means Teaching Staff.

EXCHANGE STUDENTS means students attending the HOST institution with no requirement to pay tuition fees to that institution and where reciprocal obligations exist for the HOME institution to accept for enrolment students from the HOST institution in exchange, subject to the conditions outlined in this Agreement.

INTELLECTUAL PROPERTY means statutory and proprietary rights in respect of inventions, patents, registered and unregistered designs, registered and unregistered trade marks or applications thereof, circuit layouts, copyright, Confidential Information, scientific discoveries, know-how, and all other intellectual property rights as defined in Article 2 of the Convention Establishing the World Intellectual Property Organisation, 1967.

NEW INTELLECTUAL PROPERTY means any Intellectual Property arising directly out of the conduct of the academic activities under this Agreement.

PRE-EXISTING INTELLECTUAL PROPERTY means any Intellectual Property that is owned by a Party which is made available for the purposes of this Agreement prior to the commencement of this Agreement or during the Term of this Agreement, which Pre-existing Intellectual Property has been adequately identified by that Party before being so made available, and which that party is free to disclose to other parties without being in breach of any obligations to a third party.

Shinshu, Curtin Staff & Student Exchange Page 1 of 6

ADMINISTRATION

Administration of this Agreement shall be the responsibility of the parties listed in the Addendum A. Each institution will appoint an officer who will be responsible for the day-to-day coordination of the programs, including the selection and counselling of participating students.

CURTIN and SHINSHU shall undertake all measures as are seen reasonable to give maximum effect to the student and staff exchange program. Such actions will include the exchange of academic handbooks, newsletters and promotion material. Administration of this Agreement shall be the responsibility of parties listed in the Addendum A.

SIGNATURES

This Agreement constitutes the entire Agreement between the parties. There are no understandings, agreements, or representations, oral or written, not specified herein regarding this Agreement. No amendments, consent, or waiver of terms of this Agreement shall bind either party unless in writing and signed by all parties. Any such amendment, consent, or waiver shall be effectively only in the specific instance and for the specific purpose given. Nothing in this agreement shall be construed as creating a legal relationship between the institutions. CURTIN and SHINSHU by the signatures of their authorised representatives below, acknowledge having read and understood the Agreement and agree to be bound by its terms and conditions. This agreement is signed in two copies in English. Each institution to the agreement shall retain one copy.

Signed for and on behalf of
SHINSHU UNIVERSITY

President
Dr Atsushi Komiyama
Date: 15 September, 2009

Signed for and on behalf of
CURTIN UNIVERSITY
OF TECHNOLOGY

Vice Chancellor
Date: 21.8.09

Shinshu, Curtin Staff & Student Exchange Page 6 of 6

３．新たな短期留学プログラムの発足と国際交流委員会への名称変更

2014 年には、シンガポールおよびネパールの夏期海外研修保健医療スタディツアーのプログラムが加わった。これに伴い、2014 年 4 月より委員会名が、カーティンプログラム実施委員会から保健学科国際交流委員会に名称変更された。

シンガポール保健医療スタディツアーは、理学療法専攻（応用理学療法学）の Goh Ah Cheng 准教授が Singapore General Hospital：SGH での講義や活動を継続していたことから交流が

あり、学生の研修を含めて協定を結んだ。

ネパール保健医療スタディツアーは、看護学専攻広域看護学領域の奥野教授（公衆衛生看護）がかねてより現地のNPO活動を支援してきたこと、学生からの渡航訪問希望が継続していたことから、プログラムが発足した。

教員と学生の交流に関する協定書（2013. Singapore Health Services PTE Ltd.）

MEMORANDUM OF UNDERSTANDING
FOR THE DEVELOPMENT OF ACADEMIC COOPERATION
Between
SINGAPORE HEALTH SERVICES PTE LTD ("SINGHEALTH")
SINGAPORE
And
SCHOOL OF MEDICINE, SHINSHU UNIVERSITY
NAGANO, JAPAN

In furtherance of their mutual interests in the field of education and research and as a contribution to increased international cooperation, SingHealth, through its Group Allied Health, and Shinshu University, through School of Medicine agreed that:

1. The parties will:
   i) cooperate in the exchange of information relating to their activities in teaching and research in fields of mutual interests;
   ii) promote appropriate joint research projects and joint courses of study, with particular emphasis on internationally funded projects;
   iii) endeavour to encourage students and staff to spend periods of time in the host institution. The exchange of students will be dependent upon the execution of a formal Student Exchange Agreement mutually agreed between the parties in writing prior to commencement of this activity;
   iv) conduct cultural projects, as mutually agreed in writing between the parties, prior to commencement of this activity;
   v) conduct study tours, as mutually agreed in writing between the parties, prior to the commencement of this activity;
   vi) provide Study Abroad opportunities at undergraduate and graduate level as mutually agreed in writing between the parties prior to the commencement of this activity.
2. The aim of the Memorandum of Understanding shall be to achieve a broad balance in the respective contributions and benefits of the collaboration, and this shall be subject to periodic review by both parties.
3. The coordinators from the parties will prepare an annual joint report on activities in the areas of cooperation under this Memorandum of Understanding.
4. In the implementation of specific cooperative programs, a written agreement covering all relevant aspects including funding and the obligations to be undertaken by each party will be negotiated, mutually agreed and formalised in writing, prior to the commencement of the program.

   As such this Memorandum of Understanding does not of itself create any legal obligation of any kind on either party to undertake the collaboration described herein.
5. This Memorandum of Understanding will take effect from the date of its signing and shall be valid for a period of five years from that date unless sooner terminated, revoked or modified by mutual written agreement between the parties, and may be extended by mutual written agreement.

   Either party may terminate the Agreement at any time during the term by the provision of three months written notice to the other party.

6A.1 A Party in receipt of Confidential Information from the other Party shall not use or disclose the other Party's Confidential Information without that other Party's prior written consent other than (i) for the purposes of carrying out this Memorandum of Understanding, provided any disclosure is only to such of the receiving Party's personnel or to its related company and its personnel who need to know and who are made subject to the confidentiality requirements of this Memorandum of Understanding or (ii) as required by law.

6A.2 Confidential Information means (i) terms of this Memorandum of Understanding and (ii) all information (in whatever form) disclosed by one Party to the other, whether before or after the date of this Memorandum of Understanding but excludes information which (a) is or becomes public knowledge other than through a breach of this Memorandum of Understanding (b) the recipient can show to the discloser's reasonable satisfaction to have been in the recipient's lawful possession prior to disclosure or (c) the recipient can show to the discloser's reasonable satisfaction to have been lawfully received from a third party not obliged to keep that information confidential.

6A.3 Subject to Clause 6A.6, the Parties shall not make any public announcement in relation to this MOU without first obtaining the approval of the other Party.

6A.4 Subject to Clause 6A.6, each Party shall not use any name, logo, trade name, trademark, service mark or other symbol associated with the other Party without the prior written consent of the other Party.

6A.5 Each Party shall respect the intellectual property of the other Party.

6A.6 Notwithstanding anything to the contrary in this Clause 6A, Shinshu University shall be entitled to communicate the existence of this Memorandum of Understanding in its internal communication (including in its website and in-house publications).

IN WITNESS WHEREOF, the parties hereby affix their signatures on the date and place first above mentioned.

Signed by)
Name: Prof. Dr. Yoshimitsu Fukushima)
Designation: Dean, School of Medicine)
duly authorised to sign for and on behalf of:)
SCHOOL OF MEDICINE, SHINSHU UNIVERSITY)
in the presence of :)
Name: Prof. Masayoshi Ohira
Signature: Masayoshi Ohira
Signature
Date: Aug. 9, 2013

Signed by)
Name: A/Prof Celia Tan)
Designation: Group Director, Allied Health)
duly authorised to sign for and on behalf of:)
SINGAPORE HEALTH SERVICES PTE LTD)
in the presence of :)
Name: Ms. Tan May Yan
Signature:
Signature
Date: Aug 20, 2013

Ⅲ．信州大学医学部保健学科の国際交流プログラム概要

１．プログラムによる育成人材像および達成目標

1.他国の人々と協同して活動ができるように英語コミュニケーション力を高め、 国際社会に貢献できる人材を育成する。
2.英語による学習から、異文化交流の意義と魅力を体感する。
3.異文化での学習・生活体験を通じて、国際的視点から医療従事者としての態度を涵養する。
4.卒前・卒後教育、臨床の機会を自ら国外にも求め、国際的に活躍できる医療従事者を育成する。
5.海外への大学院留学や日本に留学した学生などと、英語を用いて共同研究ができる人材を育成する。

２．国際交流プログラムの全体

1. 大学間学術交流協定に基づくオーストラリア・カーティン大学 (Curtin University)夏期海外単位認定プログラム
   カーティン大学や医療機関での学習および現地ホームステイを中心とする体験プログラム
2. 信州大学―ネパール連邦民主共和国夏期海外研修保健医療スタディツアープログラム
   ネパール、カトマンズ他の地域においてNPO活動と現地住民との関わりを中心とする体験プログラム
3. 信州大学―シンガポール共和国夏期海外研修保健医療スタディツアープログラム
   シンガポールの主に医療機関でのレクチャーおよび見学を中心とする体験プログラム

Ⅳ. 信州大学-Curtin University

大学間学術交流協定に基づく夏期海外単位認定プログラム

信 州 大 学 － Curtin

１．カ-ティン大学の概要

１．設立

1）1967 年：The Western Australian Institute of Technology（WAIT）として創設。

2）1987 年：Curtin University of Technology（カーティン工科大学）となる。

3）2010 年：Curtin University（カーティン大学）となる。

＊カーティン工科大学の名称は、オーストラリア首相を歴任したジョン・カーティン創設者に由来する。パースは日本でも古くから遠洋漁業の基地として知られている。広大なキャンパスを有機的に機能させるため、学内に国際教育担当部門を独立させ、情報ネットワークを整備し、国内外の教育研究機関と遠隔地教育・研究を推進している。1996 年から、シンガポール、マレーシア、インドネシア、香港等の教育機関とインターネットを利用した学位取得課程を展開し、実績を上げている。大学院教育では、卓越した教育プログラムが評価され、非英語圏のみならずアメリカ、カナダ、ヨーロッパの留学生も相当数在学している。

２．位置

1）西オーストラリア州

2）メインキャンパスはパース（Perth：西オーストラリア州の州都。人口約 120 万）の郊外ベントレー（Bentley：中心部より 10 キロ南東へ位置、海岸まで車で 20 分）に立地し、他に Perth 中心部の大学院キャンパスとその他のキャンパス（海外を含む）を有する（Kalgoorlie, Margaret River, Northam, Perth, Shenton Park, Sydney; Malaysia, Singapore）.

Address:Kent Street, Bentley, WA6102, Perth, Western Australia ℡ :08-9266-9266, HP-address: http://www.curtin.edu.au/

３．学部等

1）学部：経営学部、健康科学部、人文学部、理工学部、先住民研究

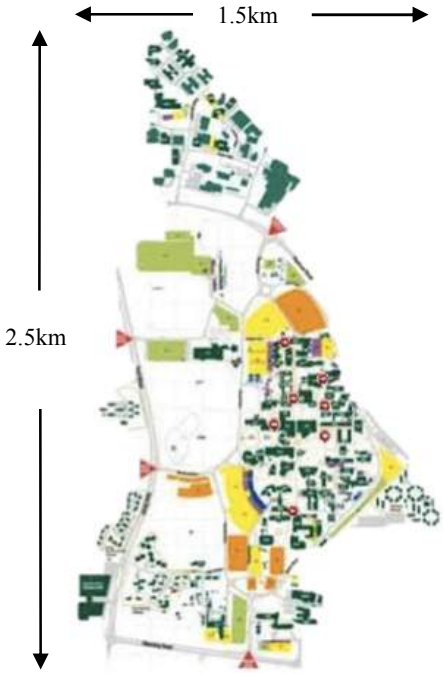
2）大学院：経営学、健康科学、人文科学、理工学

４．学生数（2011 年）および
教職員数（2011 年）

1）学生数： 63,321 人
うち，通信教育課程 16,326 人
現地留学生： 10,365 人
在外留学生: 9,147 人
（オーストラリア外キャンパス，センター在

2）教員数： 1,533 人

3）職員数： 1,863 人



２．平成 26 年度夏期海外単位認定プログラム

1. はじめに

信州大学-カーティン工科大学間学術交流協定にもとづき、平成 26 年度夏期海外単位認定プログラムが平成 26 年 8 月 9 日から 8 月 31 日の約 3 週間にわたり、カーティン大学およびパース市内外の関連施設・病院で実施された。本年のプログラムには17 名の信州大学医学部保健学科学生が参加した。

カーティン大学での単位認定プログラムの実施にあたり、5 月から 7 月にかけて、単位認定プログラム全般のオリエンテーション、研修内容の説明、研修関係資料の配布と事前学習の説明が 7 回行われた。

2. 夏期海外単位認定プログラム

1) 目的：他大学・文化での学習・生活体験を通じ、国際的視点から医療従事者としての態度を涵養する。

2) 本学における単位認定:国際医療協力論の単位として認定する。単位認定には、信州大学、カーティン大学における全てのプログラムに参加することとし、研修レポートの提出が必須である。

3. 研修期間

平成 26 年 8 月 9 日（金）～8 月 31 日（日）、24 日間

4. 研修場所

1) 研修キャンパス； カーティン大学ベントレーキャンパス

2) 見学施設

看護学専攻

Regent’s Garden Aged Care Facility, Perth
King Edward Memorial Hospital, Perth
Fremantle Hospital, Fremantle

検査技術科学専攻

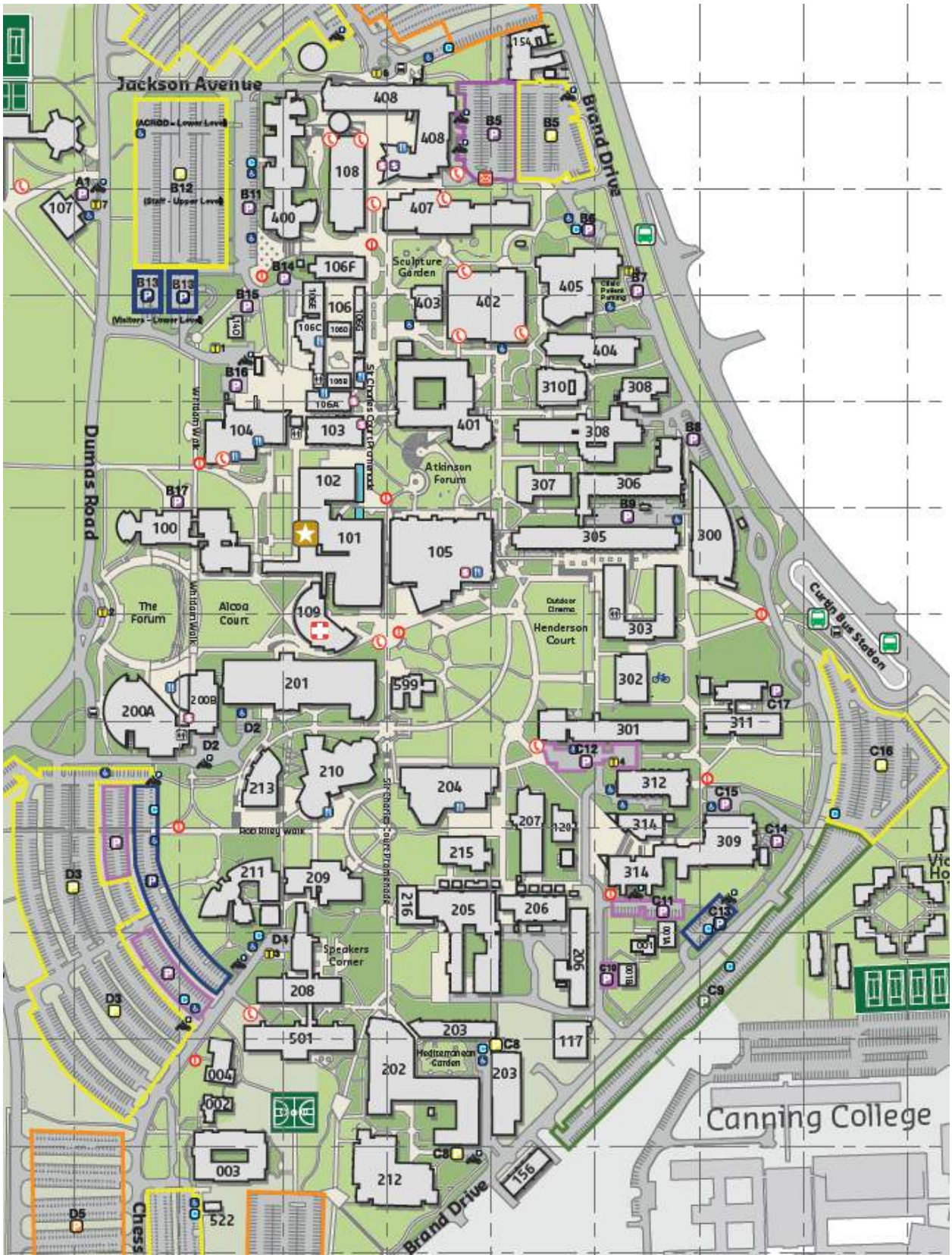
Regent’s Garden Aged Care Facility, Perth
Perth Pathology Lab, Fremantle
Australian Red Cross Blood Donor Centre, Perth

理学療法学専攻

Shenton Park Rehabilitation Hospital, Perth
Physio Services Bentley Clinic, Curtin University
Independent Living Centre, Nedlands

作業療法学専攻

Shenton Park Rehabilitation Hospital, Perth
Physio Services Bentley Clinic, Curtin University
Independent Living Centre, Nedlands


Jackson Avenue
Brand Drive
Dumas Road
Curtin Bus Station
Canning College
Sculpture Garden
Atkinson Forum
Henderson Court
Outdoor Cinema
The Forum
Alcoa Court
Whitfeld Walk
St Charles Cook Promenade
Speakers Corner
Mediterranean Garden
Chess
(ACROD - Lower Level)
(Staff - Upper Level)
(Visitors - Lower Level)
408
108
407
400
B5
B6
B7
B8
B9
B11
B12
B13
B14
B15
B16
B17
A1
107
106F
106
106C
106D
106E
106B
106A
403
402
405
404
310
308
401
104
103
102
101
105
307
306
305
300
100
109
303
302
301
311
C17
C12
C16
C15
C14
312
314
309
201
599
200A
200B
D2
213
210
204
207
120
215
211
209
216
205
206
D4
208
206
C11
C13
C10
C9
D3
501
203
C8
117
202
004
002
003
212
C5
D5
522
156
154

5.　研修プログラムの内容（Curtin University）

第１週；Orientation & English Class/Hospital Communication for Health Professional (CELC*)

・カーティン大学およびCELCのオリエンテーション
・CELCによる英語および医療英会話の授業
・キャンパスツアー
（* CELC: Curtin English Language Center ）
・Excursion（Freemantle: アボリジニーの歴史を学び、民族楽器の演奏を体験）

第２週 ； Combined Lectures

・保健医療領域の合同授業
The Australian Health Care System
・Auditing & Tutorials （看護・検査・理学・作業に分かれて、授業の聴講）
・実習（検査技術科学、理学療法学、作業療法学）
・Excursion（Swan Valley）

第３週；Combined Lectures/ Tutorial, Practice, Clinical Visits & Graduation Ceremony

・専攻別専門領域の授業
・アボリジニの文化とライフスタイルについての授業
・施設見学
① Regent’s Garden Aged Care Facility, Perth
② Shenton Park Rehabilitation Hospital, Perth
③ Fremantle Hospital, Fremantle
④ King Edward Memorial Hospital, Perth
⑤ Perth Pathology Lab, Fremantle
⑥ Australian Red Cross Blood Donor Centre, Perth
⑦ Community Based Physio Services Bentley Clinic, Curtin University
⑧ Independent Living Centre, Nedlands
・修了式

6.　参加人数

看護学	:	５名（1年生２名、３年生３名）
検査技術科学	:	６名（1年生１名、２年生１名、３年生４名）
理学療法学	:	２名（3年生２名）
作業療法学	:	４名（1年生１名、２年生３名）
合計		17名

7. 担当教員

引率：相良淳二　教授、山崎浩司 准教授
国内・学内サポート：国際交流委員会（大平、日高、佐々木、川舩(学務第二)）

8.　研修費用

1)研修費用

【内訳１】

・往復航空運賃*	159,755 円
・往復バス代	17,105 円
・特別プログラム授業料等 英語クラス、保健学共通講義、専門別（看護、検査技術、理学療法・作業療法）講義・実習、施設見学（含む移動費用、指導支援費用）、緊急事故支援システム料、滞在費（3 週間（ホームステイ、食事込））	254,060 円
計	430,920 円

*往復航空運賃は個人購入を行ったため、平均値を示した。

現地プログラム担当教員 2 名分の航空運賃、宿泊費は 26 年度信州大学知の森未来プロジェクト戦略的経費と保健学科同窓会寄付金等から計上された。

2)研修支援

平成 26 年度夏期海外単位認定研修は、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）の平成 26 年度海外留学支援制度（短期派遣）に応募、採択された。参加学生 17 名のうち、審査基準に則り 14 名に 7 万円の奨学金が支給された。残り 3 名については、信州大学平成 26 年度グローバル人材育成事業による海外活動支援に応募を行い、採択され、奨学金が支給された。

9. リスク管理体制

2011 年 2 月のニュージーランド地震時の日本人留学生被災等を踏まえ、平成 23 年度からは、信州大学が正会員となっている特定非営利活動法人海外留学生安全対策協議会（The Japanese Council for the Safety of Overseas Studies; JCSOS）の緊急事故支援システムに加入し、研修中の不慮の事故に対するリスク管理体制を強化した。本年度も当支援システムに継続して加入のうえ、プログラムを実施した。加えて、学生・教員全員が同じ旅行保険に加入した。

10. 研修日程

研修期間：平成 26 年 8 月 8 日（金）～8 月 31 日（日）の約 3 週間

詳細は「3.研修プログラムの詳細」参照。

出発 8 月 8 日（金）

14：30 信大体育館前道路集合

15：00 松本発 チャーターバス乗車

20：30 頃 羽田空港着 国際線ターミナル

22：55 羽田発 シンガポール航空 SQ635 便

8 月 9 日（土）

05：00 シンガポール着

07：45 シンガポール発 シンガポール航空 SQ213 便

12：50 パース国際空港着 各自入国審査、検疫を済ませる

14：00 頃 バスでカーティン大学へ移動

14：30 頃 カーティン大学でオリエンテーション

15：00〜16:00 ホストファミリーと一緒にホームステイ先に移動

帰国 8 月 30 日（土）（8 月 29 日（金） キャンパスでオンライン・チェックイン）
13：15 カーティン大学（Taxi Stand 3）に集合
13：45 パース国際空港（大学からチャーターバスで移動）
17：10 パース発 シンガポール航空 SQ214 便
22：35 シンガポール着
23：55 シンガポール発 シンガポール航空 SQ638 便
8 月 31 日（日）
08：00 成田着
09：00 頃 成田空港発 チャーターバス乗車
15：00 頃 信大体育館前道路着

３．研修プログラムの詳細

Curtin University

2014 SHINSHU UNIVERSITY CUSTOMISED PROGRAM - NURSING

5 students

Week 1: Nursing (week 3 ELICOS)

Time	Monday 11 August	Tuesday 12 August	Wednesday 13 August	Thursday 14August	Friday 15 August
AM	*9 - 12* Orientation program *211.227* Welcome Morning tea Computer log-in; Curtin Campus tour	*10 - 11.30* English Class: Introduction to Australian Culture *211.226*	*10 - 12* Class; English for health professionals *303.222*	*10 - 11.15* English Class: communication skills *211.226* *11.30 - 12* Robertson Library tour - meet at the inquiries desk, level 2	***Excursion:*** ***10.15 - 11.15*** *Didgeridoo Breath (learn Aboriginal history; how to play the didgeridoo); Fremantle walking tour - heritage walk;* *Fremantle Markets* *Depart Curtin 9.15am/depart Fremantle 2.30pm*
	LUNCH				
PM	Orientation Program	*12.15 - 3.30* ***Excursion:*** *Perth City walking tour (catch public transport)*	*2 - 4* ELICOS class	*1 - 3* English class; Preparation for excursion *211.226*	

Week 2: Nursing (week 4 ELICOS)

Time	Monday 18 August	Tuesday 19 August	Wednesday 20 August	Thursday 21 August	Friday 22 August
AM	*10 - 2* **Indigenous Health & Culture Workshops *Room TBA*	*12 - 1* ^Activity: language exchange with undergraduate students studying Japanese *Room 211.226*	*10 - 12* Class - English for health professionals *303.222*	*10 - 12* Class - English for health professionals *211.226*	***Excursion:*** *Swan Valley:* *Caversham Wildlife Park:* ***10 - 11*** *Molly's Farm show;* ***12.45 - 1.15*** *Margaret River chocolate factory;* ***1.30 - 2.30*** *Sandalford Winery* *Depart Curtin 8.30am/Depart Sandalford 2.45pm*
Lunch					
PM	*4 - 6* Nursing Practice 161 Lecture *Room 213.101*	*2 - 4* Clinical Practice 264 *Room 213.104*	*1 - 1.45* Tour of labs ***Building 405 Reception***	*1 - 3* English class/ preparation for excursion *211.226* *3 -5 pm* Inquiry to Nursing Practice 264 Lecture Topic: Ethics in Healthcare; a general introduction to ethics, ethical theories and	

				the relevance to nursing practice. ***Room 403.101*** ***5 – 6 pm*** Nursing Practice 162 Lecture ***Room 403.101***	

^Will be confirmed closer to date – subject to availability of Curtin students

**Indigenous Health & Culture Workshops		
10 – 12pm	300:216:CT	3 students
10 – 12pm	502C.101.TR	2 students

Week 3: Nursing **(week 5 ELICOS)**

Time	Monday 25 August	Tuesday 26 August	Wednesday 27 August	Thursday 28 August	Friday 29 August
AM	***10 – 11.30*** ***Visit:*** *Regents Garden Aged Care Facility, Booragoon*	***10 – 12*** English for health professionals, Prep for excursion ***211.226***	***10.30 – 12*** ***Visit:*** *King Edward Memorial Hospital, main entrance, Bagot Rd (Bev Thornton)*	***10 – 11.30*** English for health professionals; course & homestay evaluations ***211.226***	***9.30 – 11*** Graduation brunch and awarding of Certificates of Completion *Venue: 213 Foyer*
Lunch	*Depart Curtin 9.30am* *Depart Regents 11.30am*	12 – 12.40	*Depart Curtin 9.30am* *Depart KEMH 12.15pm*	11.30 – 2	
PM		***1.30 – 2.30*** ***Visit:*** *The Niche (ILC)* *Assistive Equipment Service* ***(all students)*** *Depart Curtin 12.45pm* *Depart the Niche 2.45pm*		***2 – 4*** ELICOS class	

Times and days for Nursing sessions and field visits are subject to change

2014 SHINSHU UNIVERSITY CUSTOMISED PROGRAM – PHYSIOTHERAPY & OCCUPATIONAL THERAPY

Physiotherapy 2 students

Occupational Therapy 4 students

Week 1: PT & OT (week 3 ELICOS)

Time	Monday 11 August	Tuesday 12 August	Wednesday 13 August	Thursday 14 August	Friday 15 August
AM	*9 – 12* Orientation program *211.227* Welcome Morning tea Computer log-in; Campus tour	*10 – 11.30* Class: Introduction to Australian Culture *211.226*	*10 – 12* Class – English for health professionals *303.222*	*10 – 11.15* English class: communication skills *211.226* *11.30 – 12* Robertson Library tour – meet at the inquiries desk, level 2	***Excursion:*** ***10.15 – 11.15*** *Didgeridoo Breath (learn Aboriginal history; how to play the didgeridoo); Fremantle walking tour – heritage walk;* *Fremantle Markets* *Depart Curtin 9.15am/depart Fremantle 2.30pm*
	LUNCH				
PM	Orientation Program	***12.15 – 3.30*** ***Excursion:*** *Perth City walking tour (catch public transport)*	***1 – 2*** Tour of PT facilities *meet Julie Baylis at reception, level 3, building 408* ***1 – 3*** Tour of OT facilities *meet Assoc. Prof Angus Buchanan reception, building 401*	***1 – 3*** English Class; Preparation for excursion ***211.226***	

Week 1: PT & OT (week 4 ELICOS)

Time	Monday 18 August	Tuesday 19 August	Wednesday 20 August	Thursday 21 August	Friday 22 August
AM	PT *10 – 12* Neuroscience LT, *room 213.104* *OT *10 – 12* Physical Rehabilitation 242, ***Room 108.208***; John Harmsen	*12 – 1* ***Activity:*** *language exchange with undergraduate students studying Japanese* ***Room 211.226***	*10 – 12* Class – English for health professionals *303.222* PT *10 – 12* Musculoskeletal Science ***Room 213.104*** *OT *10 – 12* Ergonomics & Safety Science 242 ***Room 108.114*** Dr Julie Netto	*10 – 12* Class – English for health professionals *211.226*	***Excursion:*** *Swan Valley:* *Caversham Wildlife Park:* ***10 – 11*** *Molly's Farm show;* ***12.45 – 1.15*** *Margaret River chocolate factory;* ***1.30 – 2.30*** *Sandalford Winery* *Depart Curtin 8.30am/Depart Sandalford 2.45pm*

	LUNCH				
PM	OT ***2 - 4*** OT Principles and Practice 142 laboratory ***Room 108.119***; Ben Milbourn	PT ***1 - 2*** Lifespan Health Science ***room 403.101*** PT ***2 - 4*** Cardiopulmonary Science, ***room 401.002*** ***2 - 4*** OT ELICOS	***2 - 4*** PT ELICOS OT ELICOS	***1 - 3*** English class/preparation for excursion ***211.226***	

Week 1: PT & OT **(week 5 ELICOS)**

Time	Monday 25 August	Tuesday 26 August	Wednesday 27 August	Thursday 28 August	Friday 29 August
AM	***10 - 11.30*** ***Occupational Therapy & Physiotherapy*** ***Visit:*** *Royal Perth Rehabilitation Hospital, Shenton Park, meet at "old" hospital entrance (not the outpatient entrance off Selby Street, but in a little near the tennis courts)* *(Justine Garbalini physio reception is 9382 7307)* *Depart Curtin 9am* *Depart RPH 11.45am*	***10 - 12*** English for Health Professionals, Prep for excursion ***211.226***	***PT 8.30 - 12.30*** *Curtin Student Physiotherapy Clinic, level 3, building 404; John Watson*	***10 - 11.30*** English for Health Professionals; course & homestay evaluations ***211.226***	***9.30 - 11*** Graduation lunch and awarding of Certificates of Completion *Venue: 213 foyer*
Lunch		***12 - 12.40***		***11.30 - 12***	
PM		***1.30 - 2.30*** ***Visit:*** *The Niche (ILC)* *Assistive Equipment Service* ***(all students)*** *Depart Curtin 12.45pm* *Depart The Niche 2.45pm*	***OT 11 - 12*** ***Visit:*** *State Child Development Centre, meet Amy Lumsden (94269435) at* ***10.45*** *at OT gym, building #16, Rheola St, West Perth*	***1 - 2.30*** ***Occupational Therapy & Physiotherapy*** ***Visit:*** *WAIS (Western Australian Institute of Sport) - tour of facilities and presentation* ***1.00 presentation*** ***1.45 tour*** *Depart Curtin 12pm* *Depart WAIS 2.45pm*	

Times and days for PT & OT sessions and field visits are not confirmed and subject to change

**students are required to wear flat enclosed shoes, trousers and t-shirt type top. This is a physical/active laboratory.*

2014 SHINSHU UNIVERSITY - BIOMEDICAL SCIENCE PROGRAM

6 Students

Week 1: Biomed **(week 3 ELICOS)**

Time	Monday 11 August	Tuesday 12 August	Wednesday 13 August	Thursday 14August	Friday 15 August
AM	*9 - 12* Orientation Program *211.227* Welcome Morning tea Computer log-in; Curtin Campus tour	*10 - 11.30* English Class - Introduction to Australian Culture *211.226*	*10 - 12* Class - English for health professionals *303.222*	*10 - 11.15* English class: communication skills *211.226* *11.30 - 12* Robertson Library tour - meet at the enquiries desk, level 2	*Excursion:* *10.15 - 11.15 Didgeridoo Breath (learn Aboriginal history; how to play the didgeridoo); Fremantle walking tour - heritage walk;* *Fremantle Markets* *Depart Curtin 9.15am/depart Fremantle 2.30pm*
	LUNCH				
PM	Orientation Program	*12.15 - 3.30* *Excursion:* *Perth City walking tour (catch public transport)*	*1 - 2* Tour of Biomedical Science facilities, *meet TBA*	*1 - 3* English class; Preparation for excursion *211.226*	

Week 2: **(week 4 ELICOS)**

Time	Monday 18 August	Tuesday 19 August	Wednesday 20 August	Thursday 21 August	Friday 22 August
AM	*8 - 10* Pathology 232 *Room TBA*	*12 - 1* *Activity:* *language exchange with undergraduate students studying Japanese* *Room 211.226*	*10 - 12* Class - English for health professionals *303.222*	*8 - 9* Immunobiology 234 Lecture *Room TBA* *10 - 12* Class - English for health professionals *211.226*	*Excursion:* *Swan Valley:* *Caversham Wildlife Park: 10 - 11* *Molly's Farm show; 12.45 - 1.15* *Margaret River chocolate factory;* *1.30 - 2.30* *Sandalford Winery* *Depart Curtin 8.30am/Depart Sandalford 2.45pm*
	LUNCH				
PM	*10 - 1* Pathology Laboratory *Room TBA*	2 - 4 ELICOS class	*2 - 5* Haematology 234 Laboratory *Room TBA*	*1 - 3* English class/ preparation for excursion *211.226*	

Week 3: (week 5 ELICOS)

Time	Monday 25 August	Tuesday 26 August	Wednesday 27 August	Thursday 28 August	Friday 29 August
AM	***10 - 11.30*** ***Visit:*** *ˆRed Cross,* ***meet at reception (ask for Marie Warden)***	***10 - 12*** English for Health professionals, prep for excursion ***211.226***	***10 - 11.30*** ***Visit:*** *RPH Pathology Laboratory* ***Meet Western Entrance to PathWest, level 2 North Block RPH***	***10 - 11.30*** English for Health professionals; course & homestay evaluations ***211.226***	***9.30 - 11*** Graduation brunch and awarding of Certificates of Completion *Venue: 213 foyer*
Lunch		12 - 12.40		11.30 - 2	
PM	*Depart Curtin 9am* *Depart Red Cross 11.45am*	***1.30 - 2.30*** ***Visit:*** *The Niche (ILC)* *Assistive Equipment Service* ***(All students)*** *Depart Curtin 12.45pm* *Depart The Niche 2.45pm*	*Depart Curtin 9am* *Depart RPH 11.45am*	***2 - 4*** ELICOS class	

Times and days for Biomedical Science sessions and field visits are not confirmed and are subject to change

ˆ fully enclosed shoes must be worn

４．学生アンケート（N＝14）

1．出発前の準備

①費用の捻出

	N
家族が全額負担	8
自己資金のみ	0
自己資金と家族の支援	6

②　渡豪前の自己学習

	N
自己学習した	8
何もしなかった	6

③プログラムの発表時期

（4 月の新入生・在校生オリエンテーション）

	N
適切	13
不適切	1

④参加申し込み締め切り期限

	N
適切	11
不適切	3

⑤オリエンテーション時期・回数

	N
適切	14
不適切	0

⑥オリエンテーション内容

	N
適切	13
不適切	1

【事前学習した内容】

・英語：英会話、英語について、英語のリスニング等（複数名）
・オーストラリアの文化について
・オーストラリアでの生活などについてネットで調べた。
・行く大学についてやオーストラリアパースの環境について
・大学の英語の講義を週３とり、課題に取り組んだ。

【事前学習が必要と感じた内容】

・英会話、英会話をある程度勉強し、また医療の英語も覚えるべきであった。
・日本における保険の仕組み、老人ホームや産科病院のシステム
・オーストラリアの医療、保険制度について

【④参加申し込み締め切りのコメント】

・5 月下旬
・募集していることをもっと知らせ、6 月くらいまで申し込めるとよい

【⑤オリエンテーション時期のコメント】

・参加した先輩たちに、何回か来てもらえるとよいと思う

③プログラム発表時期、⑥オリエンテーション内容へのコメントは特に無し。

【参加動機】

・ホームステイの経験（複数）

・海外への興味や経験への期待（複数）

—海外の人と交流して視野を広げたい

—自分を成長させたい思い

—他国の文化に触れ、自身の視野を広げた

—大学在学中に海外へ行くなど、沢山の経験をしたい

—海外の文化、医療面での日本との違いに直に触れてみたい

・海外の医療への興味（複数）

—海外の医療現場を見ることで自分の将来の視野を広げたい

・オーストラリアの観光への興味（複数）

・英語語学力の向上

—自分の英語力を試したかった

—英語を話すことへのネガティブさの克服

—英語が苦手なので生の英語に触れて英語に対する考え方を変えたい

・専門領域の学習や施設見学等の経験

—海外で検査技師として働いたり、医学の勉強をしたいため、今回のプログラムを通して海外の医療を少しでも学べると考えた

・プログラムへの関心・興味

—このような貴重な経験をできる機会はなかなかない（複数）

・より一層の勉学の機会だと思った

・学生である今でしかできないことだと思った

・夏休みの有効活用

2．ホームステイについて

	やや不満	どちらともいえない	やや満足	非常に満足	無回答
①費用について	１人	２人	８人	２人	
②交通の便について	１人	５人	３人	３人	１人
③食事について		２人	４人	７人	１人
④ホストファミリーについて			３人	１０人	１人
⑤全体の満足度			６人	７人	１人

（１）よかったこと

＜英語力が向上した＞

・しゃべらなければならい状況に置かれることで英語力の向上につながる

・自然と英語を話すことができた

・英語の会話力を伸ばすのに役立った

・英語でコミュニケーションをとることで英語力を上達させることができた気がします

・自分の他に多くの留学生がいたので、英語を話す機会が人より多く持てた

・ネイティブの方と長期間接する機会はなかなかないので、その分勉強できる事が多く良

かったと思う
・英語の日常会話を聞くことが出来たこと

＜豪州の異文化を体験できた＞
・異文化交流ができた
・現地の生活を感じることができた
・日本とオーストラリアの生活スタイルの違い文化の違い、又それだけではなく一緒にホームステイに来ていた中国人の人とも交流することができた
・お互いの文化を交換し合えた
・たくさんの国籍の方と出会えたこと。日常的に英語を使う経験ができたこと。
・私はオーストラリア人の夫婦のお家にホームステイしたので、オーストラリアの料理や文化に直に触れることができたと思うし、ホームステイしたことで英語を聞く力が伸びたと感じました。

＜人間関係が広がった＞
・人の温かさを感じ、異文化に触れることができて、非常に良い経験ができたと感じた
・ホストファミリーはとても親切で、快適に過ごすことができた。英語をうまく使えなかったが、英語による日常会話も経験できた。プログラム終了後もメールのやりとりなど連絡を取ることもでき、とてもいい関係が築けた

＜自分が前向きに成長できた＞
・いろいろなことを学ぶことができた
・親元を離れてみて、両親や友人のありがたみを実感することができた
・自分がその環境に馴染まなければいけないので自立しようと思えた

（2）困ったこと
＜コミュニケーションの難しさ＞
・ニュージーランド訛りがあったため、英語が聞き取りにくかった
・英語の知識が不十分なため、会話に困ってしまった。
・こちらがわからなくて、聞き返しても、あまりゆっくり話してくれなかったこと

＜生活の違い＞
・お風呂に浸かれなかったこと
・洗濯の回数が三週間に１回の頻度だったため、服の着回しに少し苦労した
・ホームステイ先の食生活が合わなくて苦労しました。

＜ホストファミリーの内情＞
・彼らはほとんどが外食で、ファストフードが多く、野菜をほとんど食べない家族だったので毎日野菜を食べる生活をしていた私には辛かったです。ただ野菜を食べたいと言ったところ多少は改善されましたがやっぱり野菜の量が少なくて辛かったです。
・貸してもらっている部屋や家の掃除をしたほうがいいのかと思ったが、家の人が家にいないことが多く言われていないことをどうしていいのかわからなかった。
・子供が気分屋だったので家族もどうしても両親が子供中心だったので言いたいことを

言いにくいときがあった
・他に留学生がホームステイしていることを聞かされておらず、男子学生が二人いることに驚いた。できれば留学生がいることを教えてほしい。
・シャワーを使うとき、お湯が出ないことがよくあり、お湯の出し方も聞いたがあまり出なかった。

＜その他＞
・交通費が負担になってしまった部分があった。

3. 研修コースについて
１）印象に残った見学先
・Regents Garden Aged Care Facility
－生活の場を老人施設の部屋ではなく、その人の家のように捉える考え方や、そのデザインに感動した。日本の医療を新たな視点で考えるきっかけになった。
－案内してくださったスタッフが日本人で日本語で説明してくださったので分かりやすかった。沢山の機能や施設、配慮もあり、とてもためになった。
・Royal Perth Hospital
－とても広く、設備も充実していたのが印象的だった。案内してくれた方がとても丁寧にいろいろと説明してくださったから。
－病理の研究所の規模の大きさに驚いたし、実際に働いている姿を見れてよかった
－想像以上に規模が大きくて、設備も充実していたから。
－日本の病院と違い、患者さんたちが入院中もリラックスして過ごせる工夫がされていた。
－現地の病院の様子を見ることができたから。

・病院の検査室
－担当の方がとても良い人で、比較的ゆっくりと英語で話してくださったので理解しやすかったです。質問にも丁寧に答えてくださったり、1 年で専門知識があまりない私のことを気遣ってくださったので嬉しかったです。
・発達病棟：日本の病棟と少し違ったように感じたため
・ILC
－このような施設があるということを今回初めて知りました。実際に車いすやいろいろな補助具を体験してから購入することができるというのはとても効率的でよいことだと思いました。
・Red Cross
－普通の病院とは違い血液専門の施設を見学できる事は日本でもなかなかない事なのでとても印象的でした。
・King Edward Memoiral Hospital
－とても古く政府の経営する病院であると聞いていたので、設備などがあまり良くないのかなと思っていたのですが、全くそのようなことはなく、　しっかりと治療できる体制が整っていたことに驚いたからです。

２）よかったこと

＜海外の医療について学習できた＞

・海外の医療を観ることで、日本の医療をより新たな視点から考えることができるようになったと思う。
・良さや取り入れたいこと、日本の医療の問題点などに気付くことができた。
・これから学ぶ専門科目について予習することができました。
・専門領域のことについて多くの経験ができたことです。
・例年作業療法はあまりみられないということだったのですが、今年は色々な授業に参加できた。
・様々な授業を受けいれて英語だけでなくいろんな知識が身に付いた。
・英語の授業、専門の授業、施設見学、観光、カーティン大学生との交流など幅広く網羅できて良かった。
・海外の医療施設はこういった機会でないと見る事が出来ないので非常に良い経験となった。

＜異文化体験＞

・生徒から良い刺激を受けましたし、施設見学では日本との違いなどを知ることができてよかったです。
・授業だけではなく、公共機関を利用して町へ行ったりすることで異文化に触れ、たくさんのことを学べた。
・英語の授業の一環で、日本語を勉強をしている学生さんと交流できて楽しかった。英語の授業、施設見学もためになって楽しめた。

＜英語力の成長＞

・英語力が少し上達したと思う。日本の良い部分や悪い部分を留学を通して知ることができた。
・プライベートの施設と政府の経営する施設の両方を見学することができたことが良かったです。
英語の授業内容が日常の中でも使えるものが多く、助かりました。

＜自分の変化＞

・先輩方や先生に質問したり、自分なりに予習したりして積極的に学べました。
・今回このプログラムに参加してみて、他国の理学療法学の事情を知り、新しい挑戦やステップアップに対して、意欲がわいてきたこと。
・自分と同じ専攻の学生と話す機会が得られたこと。

＜その他＞

・保健センターの存在

３）困ったこと

＜英語力の乏しさ＞

・英語が出来る人に頼ってしまいがちだったかも
・英語力のなさを痛感しました。

＜講義・プログラムについて＞

・見学は特別な施設（高級施設や専門病院など）を見ることが多かった。
・また、特別がゆえに日本との比較がしづらかった。
・英語が早すぎて理解できないことがありました。
・専門の授業ではいきなりカーティンの学生と混じったが、全て英語でわかりにくいこともあるので、レジュメをくれたりせめて事前にどういう授業内容かを教えて欲しかった。（予習もせずに実習するのはなかなか大変だった）
・学校での英語以外の講義は、話やスライドのスピードが早く、板書するのに必死になってしまった。レジュメを頂けるという話があったがもらえなかった。授業の内容を把握するためにもプリントなどが欲しかった。

＜その他＞

・それぞれの良さは感じることができたが、一般的なオーストラリアの医療水準がよくわからなかった。
・カーティン大学以外ではネットが使えなかったため、道に迷ったときなど、ネットを使って調べることが出来なかったために少し困った。
・基本バス移動で、自分がバスに酔いやすい体質だったのでその管理が大変だった。

（4）要望他

・言語交流を多くとってほしい
・一般施設や、普通の病院も見学して、日本との比較を行いたい。
・授業の時間や施設見学の時間はもっとあっても良い。もっとたくさんの専門授業に参加し、より多くの場所に見学に行きたかった。
・もう少し授業数が多くてもよいと思う。
・難しいとは思うのですが、多少は学年の違いによる専門知識の差を考慮してもらえると嬉しかったです。
・ELICOS クラスは正直いきなり応用的な内容だったので、普段の基礎的な英語の授業とはギャップがあって大変だった。
・非常に充実したプログラムでした。
・もう少し、英語の授業や専門の授業を受けたかった。
・もう少し、現地の生徒と話す機会がほしかった。

4. 研修が与えた影響（自由記載）

＜学ぶことへの意識の変化＞

・将来は、今回感じた日本の医療の改善点やオーストラリアの医療の良さを現場に還元できたらと考える。
・英語の学習意欲が向上した。
・専門分野についても、より深く独自の視点をもって積極的に学習していかなければならないと感じた。
・もっと英語力を上達させて、様々な国の人と交流をしてみたいと思ったし、日本以外の医療システムや医学を学ぶことができたことはとても良い経験になったと思う。
・専門知識の少なさを実感したので、これから学んで知っていきたいと思います。
・今回、参加して英語を改めて学ぶことができてよかったです。また、自分が信州大学で学んでいることを海外でも学ぶことができ新鮮な気持ちと同時に、もっと勉強を頑張ろ

うと思いました。
・施設見学や、カーティン大学生の勉強に対する姿勢をみて、モチベーションが上がった。また、これからも英語の勉強を続けていきたいと思った。
・今までは日本の看護事情についてにしか目を向けていなかったのですが、今回のプログラムを通じて海外の看護や保険体制に目を向けるきっかけを得ることができ、もっと広く視野を持って今後の勉強に取り組んでいきたいと思いました。

＜専門分野や医療への学習意欲の向上＞
・日本以外の医療システムや大学での授業の様子などを実際に見て学べたことは貴重な経験だったと思う。
・世界でも検査の学んでいる内容は一緒だと思えたし、世界の医療にも興味をもてたのでもっとこれから将来の選択肢に幅が広がりそうだと思った。
・日本の医療制度や施設もよく知らない状態だったが、オーストラリアの現状を知るのはいい経験になった。これから日本の医療についても学んでいくが、メリット、デメリット含め比べていけるといい。将来は地元での就職を考えているのだが、海外で学んだことも生かしていけるといいと思う。

＜視野の広がりと将来展望＞
・国際化の進む医療で最先端の情報を得られるだろう
・世界は広いということを実際に体感することが出来た
・日本の医療を新たな視点で捉えるきっかけとなった。
・離れてみて日本の素晴らしさを知り、これからも日本で生活したいと思いました。
・将来の視野が広がるきっかけとなった。グローバルに対応できる人になりたいと思う。
・英語の能力について自信をつけることができた。また、国外に対して視野を広げることができ、将来英語を使う機会があれば、活かしていきたいと思う。

＜人間としての成長＞
・英語を話すことに対する抵抗が小さくなったと思う。
・異文化交流ができた。
・カーティン大学の学生と友達になり、お互いの文化に触れ合えたことはとても刺激的で興味深かった。
・とても良い経験になったと思います。人生の糧になりました。異国の地で過ごしたということは、自信にもつながりました。
・留学も長期海外に行くことも初めてだったので、英語で海外の人と交流することはなかなかない機会だった。ホームステイはお互いの文化を交流しあえるし、寮と違って１人だから、自分もしっかりしなきゃと思えてとても良かったです。
・授業面以外では、観光も含め、異国の文化や生活に触れることができ、日本を出たことがなかった私にとっては大きな経験値になった。沢山の方に支えられ無事にプログラムを終えることができ、貴重な夏だった。

5. 研修に対する満足度

	悪かった	どちらとも いえない	よかった	大変 よかった	無回答
①実施時期について		1 人	2 人	10 人	1 人
②期間について	1 人	4 人	2 人	6 人	1 人
③コースの構成について		4 人	2 人	7 人	1 人
④研修先のスタッフの対応		1 人		12 人	1 人
⑤信州大学教官の対応		2 人	4 人	7 人	1 人
⑥全体としての評価		1 人	4 人	8 人	1 人

１２．学生レポート

看護学専攻 3 年 12M1152K　林 美沙

3 週間という短い期間ではありましたが、今回の短期海外研修プログラムへの参加は、私にとって、とても実りあるものとなりました。一般に行われている語学研修だけでなく、現地の専門科目の授業へ参加したり医療関係施設を見学したりすることにより、日頃の大学生活や日本国内ではできない掛け替えのない経験をすることができたと思います。ここでしか得られない気づきが数えきれないほどたくさんありました。

まず、医療についてです。看護学専攻では主に 3 か所の施設見学がありました。

１つ目は、カーティン大学内にある lab です。ここは、日本でいう看護学生の演習室ですが、日本の大学にある演習室とは大きく異なり、その本格さに驚かされました。

Lab に備えられているものは、すべて本物で、酸素の栓を開ければ実際に酸素が出てくるし、ナースコールを押せば音が鳴り、lab 内にあるナースステーションにつながります。また、モデル人形に繋がれているモニターも本物です。これらの波形などは、教員がコンピューターで管理できるようになっており、患者が急変し、学生が正しい処置を施せば、患者の状態も安定するという一連の流れも、lab 内で練習することができます。モデル人形は、学生の質問に対して、yes/no で返答することができ、むせたり泣いたりすることもできます。脈もあります。薬剤室もあり、学生はそこから必要な薬剤を選択して持ち出す練習も行え、一見病院と間違えてしまうかのような本格的な造りと非常にリアルな患者により、学生は実際の現場に非常に近い形で学ぶことができるのです。

残念ながら、日本における大学内の演習では、場面設定が行われ、想像や仮の物品で行われることがほとんどです。病院とはちがう“演習室”の中での練習に留まってしまいます。このような本格的な lab で練習できたら本当に勉強になるなあと感じるとともに、海外の学生の中にはこんなに本格的に練習を重ね、学んでいるのだということを感じ、私もより現場を想定した学習をしていかなければならないと痛感させられました。

２つ目は、高齢者介護施設です。ここは、オーストラリアの中でも特別な高級施設であり、比較的新しい場所でした。そういったこともあり、施設の設備はとても充実していて、日本から見たら斬新なアイディアが多く取り入れられていました。中でも私が感動したのは、利用者の一人一人に

“病室”ではなく、個人の“家”があるという考え方です。ポストも小さな庭もあり、外に出ればバス停と設定されたベンチまで置いてあります。まるで小さな街のような造りになっていました。私たちは普段、部屋ではなく個人の家で生活しています。しかし、施設に入居して与えられるのは、部屋です。単調で質素な部屋です。家に似せた造りにすることで、より施設の外の生活に近づけているというお話を聞き、とても良い考え方だと思いました。

３つ目は、産婦人科病院です。ここは公共の医療施設であるため、すべて無料で医療サービスが提供されます。もちろん出産も無料です。そのかわり、診察の順番待ちにはとてつもなく時間がかかります。2 年待ちもおかしくないそうです。医療システムが根本的に日本とは異なっており、大きな違いを感じました。

ここで印象に残ったことは、産婦は出産したその日に退院して自宅に帰り、その後の 4 日間は助産師による自宅訪問により検診を行っているということです。日本では、基本的に 5 日間以上は病院に入院して過ごさなければなりません。しかし、出産を終えたお母さんはとても疲れています。慣れ親しんだ自宅であれば、ゆっくりとリラックスして過ごすことができるし、自分の食べたいものを好きなように食べることができます。これは妊産婦さんにとって良い制度だと感じました。日本では、助産師の数も少ないため、毎日自宅へ訪問するということは難しいと思われます。この病院にたくさんの助産師がいるからこそ、できることなのかもしれないと考えさせられました。

また、分娩にあたって使用する部屋の造りにも良さを感じました。オーストラリアでは基本的に、妊娠出産分娩は自然に起こることであるため、本来であれば医療処置は必要としないという考えを持っています。したがって、出産もできるだけ自然な流れで行われることが理想であり、部屋のつくりは居宅をイメージしてつくられているため、病院特有の無機質な雰囲気はありません。医療器具もできるだけ目につかないように隠されており、リラックスできるように工夫されています。日本においても、自宅出産という選択肢はありますが、病院も居宅に近い環境にしていけば、より良い出産につながるのではないかと考えさせられました。

このように、海外の医療を目にすることで日本の医療との共通点や違い、日本の良さや海外の良さ、それぞれの改善点などを感じることができました。留学前とは、異なる新たな視点で日本の医療について考えることができるようになったと思います。従来の考え方に捉われず、常により良い医療を追及するという姿勢をもち、あらゆる視点から柔軟な考えをもって、医療について考えていくことが大切だと学びました。

次に、文化の違いです。異国の地で生活していると、新しい発見がたくさんありました。オーストラリアは水が貴重であることもあり、湯船につかってゆっくり入浴することはほとんどありません。洗濯も週に 1 度だけです。中国のルームメイトは、食後に歯を磨きません。朝起きてすぐに歯を磨きます。ホストファミリーは、手を使って食事を食べます。彼らにとって、お芋は主食です。毎朝当たり前のようにキスを交わしてから別れます。1 歳の子どもは、すでにピアスを付けています。

カーティン大学の授業に参加したときには、学生の積極性に驚きました。質問や議論が飛び交い、答えがわかれば我先にと発言します。とてもにぎやかな授業で、ずっと黙って座っている日本人の授業風景とは異なります。まだまだ数えきれないほどたくさんの気づきがありました。

また、文化の違いは医療においても差が出てきます。オーストラリアでは、成人した子どもは親元を離れて生活することがほとんどです。子どもが国外にいるという

高齢者も多く、自宅ではひとりになっていまいます。こういった文化背景により、オーストラリアでは、デイサービス施設というよりは、そこに住んで暮らす高齢者入居施設の方が主流です。

また、オーストラリアは多民族国家であるため、あらゆる国の人がそこで生活しています。したがって、病院も英語のみならずあらゆる言語に対応できるようなサポートシステムを備えていました。もし、言葉の通じるスタッフや通訳師がいなければ、通訳サービスのある電話を通して会話をするという徹底した対応がとられています。

ホテルではなく、現地に暮らす家族のもとへホームステイすることにより、より深くその文化と関わることができたと思います。ホームステイは、私にとって初めての経験であり、異文化交流のほかにも、日常的に英語を話すという点で、とても良い経験になったと感じています。英語を使わざる得ない環境に身を置くことで、必然的に英語を話す機会が多くあり、英語を話すことに抵抗を持たなくなりました。また、自分の英語に少し自信が持てるようになりました。完璧な英語でなくてもコミュニケーションはとれます。流暢に話せなくても良いのです。まずは、声に出して一生懸命伝えてみることが大切であると学びました。

オーストラリアの美しい大自然と素敵なホストファミリー、日本の仲間たちに囲まれながら、この海外研修に参加できたことをとても嬉しく思います。国外で医療を学ぶ良い機会を与えてくれた家族、友達、先生方、ホストファミリー、関わったすべての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

検査技術科学専攻２年
13M1236H　山口真由

Curtin 大学での約３週間の短期留学を通して、多くの貴重な経験を得ることが出来ました。最初は英語がなかなか聞き取れず、言いたいこともうまく伝えられずもどかしい思いをしましたが、毎日英語を聞いて過ごしていくなかで少しずつ聞き取れるようになっていきました。ホストマザーは私の英語力が少しでも上達するようにと毎日コミュニケーションをとるようにしてくれ、ほぼ毎日一緒にテレビを見て少し聞き取ることが難しいところなどを説明してくれたので、現地の人が普通に話している速さの英語も理解できるようになっていきました。

ホストファミリーと一緒に暮らしていて一番大事だと思ったことは、積極的にコミュニケーションをし、明るくポジティブに何でも挑戦してやるぞという気持ちでいることだと思いました。笑顔でいることもホストファミリーと良い関係を築くためにはとても大事なことだと感じました。

オーストラリアで良いと思ったところは、スーパーで買い物をするときでもバスに乗るときでも、ほぼ必ずHi！と挨拶する習慣があるということです。朝早くて眠いときでも、にっこりしてお互い挨拶すると、とても清々しい気持ちになって今日も頑張ろう！と思えました。日本では普通のスーパーでも「いらっしゃいませ」のような他人行儀な挨拶しかしないので人間味があっていいなと思いました。

また、オーストラリアには手つかずの自然があったり、珍しい植物や動物をたくさん見ることができました。街中にはコップを洗うブラシのような形をしている植物があったり、オーストラリアの国章にも描かれているゴールデン・ワトルは春が訪れると一斉に咲く花でとてもよく知られています。

オーストラリアでは水はとても貴重な資源のため節水が必要なのですが、日本にいるときは水には全くといっていいほど気をつかっていなかったので、日本は恵まれているのだなと実感しました。
その一方で、あるガイドさんの話によるとオーストラリアの土地を開拓してニンジンを作り日本の野菜ジュースの原料になっているらしく、知らず知らずのうちにオーストラリアの自然を破壊しているのだなと感じました。日本が豊かに暮らせるのはオーストラリアだけでなく他の国のおかげなのだと思いました。

このプログラムに参加する前から、海外で働くことや貧しい国に行って自分の専門分野で何か貢献したいと考えていました。海外に行って実際に現地で暮らし現地の人と交流することで日本にいるだけでは気づくことのできないものに出会い、視野が少し広げることができると思います。
私のホストマザーは、様々な価値観、文化をもつ人と話すことで、例えその人の考えに賛同はできなくても理解する、受け止めることがとても大事なことだと話してくれました。短期留学する前と変わったところはオーストラリアなどの海外のニュースを見るとオーストラリアで出会った人達の顔が浮かんできて他人事ではなくなったということです。

Curtin 大学では様々な国の人がいて、年齢層も幅広いことに驚きました。Curtin 大学の学生はとても勉強熱心で日本語を勉強している学生の一人は日本語で書かれている夏目漱石の「吾輩は猫である」や「こころ」を完読していて日本に対する興味と日本語を少しでも身につけようとする姿勢に感銘を受けました。カーティン大学で日本語を勉強している学生は日本のアニメや歌にも詳しくて、それらを通して交流を深めることが出来ました。
寿司はオーストラリアの様々なところで普通に売られていました。オーストラリアのものは酢飯でなかったり、ネタが生魚はあまり使われていないのですが、おいしかったです。

英語力が必須と言われている今、日本では英語の勉強が義務付けられ小学生から勉強していますが、有名な本でも英語で読んで勉強したことはありませんでした。興味がないわけではないのですが、実際に英語を使わざるを得ない場面に出くわすことが少ないせいか、勉強してもしなくてもという考えがありましたが、帰国してからは、外国語を勉強しておくことはとても大事なことだと痛感しました。言語力があれば自信も湧き、もっとスムーズにコミュニケーションをとることができるし、理解もしやすい。自分が伝えたいことをもっと伝えられるようになりたいと思いました。

今回のプログラムでは病理学、血液学、免疫学の講義と実習を受けさせてもらえることが出来ました。病理学や血液学の授業ではまだ勉強していない内容も多く、専門用語も英語では分からない単語がたくさんあったため、授業中に出来る限りメモをとって、ホームステイ先に帰ってから詳しく調べて勉強するようにしました。
オーストラリアの医療制度を学び、日本の医療と比較してみて感じたことは、貧しい人もきちんと医療を受けられるようにしっかりと保障されていることはとても良いことだと思いました。その分税金が高くなったとしても最低限健康が守られることによって安心して生活が送れると思いました。

一週目、英語の授業では日常よく使う表現やカーティン大学で日本語を勉強している学生と交流をしたりしました。最初は流暢な英語がうまく聞き取れず、伝えたいこともうまく伝わらなかったのでもどかしい思いをしましたが、毎日英語に触れる生活の中で少しずつ聞き取れるようになり、きちんとした文で話すことはできなく

ても自分の言いたいことをある程度伝えられるようになっていきました。言葉だけでなくジェスチャーや表情の変化もとても大事だということを感じました。

二週目は英語の授業とともに専門科目（病理学や免疫学、輸血学）の講義や実習の授業を受けました。病理学はまだ習っていない微生物がでてきたので理解しづらいところもありましたが、とても興味深い授業ばかりでした。実習ではBiomedical Scienceの二年生の学生と一緒にピロリ菌などヒトの組織内にいるバクテリアを自分たちでHE染色し、標本を作って教授と一緒に観察しました。早い時期から正常な組織だけでなくバクテリアが感染した組織も勉強することは実際に臨床の現場で働く時にとても役に立つと思いました。

輸血学は患者さんの血液中の赤血球や白血球、単球、リンパ球、好中球、好酸球、好塩基球の数を数えて基準値と比較してどうかを評価する実習をしました。まだ大学では習っていない分野だったのでとても勉強になりました。免疫学の講義は大学で勉強した内容もあったので理解しやすかったです。全体を通して、講師の先生の英語は速く専門用語も多いので理解しづらかったです。しっかりした英語力がないと海外での勉強は本当に実のあるものにならないと思いました。

三週目は赤十字やロイヤルホスピタルやNicheに見学に行きました。赤十字では他に見学に来ていた学生と施設全体を説明を受けながら見学しました。日本では見たことのないような設備もあったりして勉強になりました。

ロイヤルホスピタルでは病理や免疫、輸血などの部署を見学させていただきました。採血室は一人一人がゆったりとした椅子に座り、リラックスして採血されているのを見て日本との違いを感じました。Nicheでは手足に障害を負った人が日常生活にできるだけ支障がないようにいろいろと工夫された道具を見せてもらうことができました。どれも工夫されていてその種類の多さに驚きました。自分の専門分野ではなく、あまり見たことがなかったので新鮮で興味深かったです。

将来、臨床検査技師となったときどの分野で働くかはまだ漠然としていて決まっていませんが、もっと英語を勉強して世界に貢献できるような臨床検査技師になりたいと思います。この短期留学をきっかけにもっと様々なことに興味を持ち、世界に目を向け、自分の視野を広げていきたいと思いました。いつか貧しい人であっても最低限の医療が受けられるような社会になるように自分が貢献できればと思います。このプログラムを通して得ることのできた貴重な経験を自信にして残りの学生生活を後悔のないようにしっかりと技術を身につけていこうと思いました。

理学療法専攻　3年
12M1309C　佐藤和香子

2014年8月、私はオーストラリアのパースに留学しました。3週間という短い期間ではありましたが、本当にたくさんのことを得て帰国することができました。このプログラムで体験した主な３つのことは、現地の方とのホームステイ、カーティン大学での教育現場の見学、そして観光です。以下、それぞれについて経験したこと、学んだことを報告したいと思います。

まず１つ目のホームステイでは、最も多くのことを学んだように思います。その多くの得たものの中で今私にとって最もかけがえのないものとなっているのは、ホームステイ先のご家族とその知り合いの方々との出会いです。ホームステイ先のお母様は非常に社交的な方で、仕事先の同僚の方と頻繁に外出するような方でした。私

も何回も一緒に出掛けようと誘っていただき、色々な場所へ連れて行っていただきました。その中で一番印象に残っていることがあります。

ある晩のことなのですが、私とホームステイ先のお母様、そしてお母様の同僚の方々8人と一緒に外食する機会がありました。驚くべきことに、その10人の国籍の数を数えてみると日本・中国・韓国・シンガポール・インドネシア・イギリス・台湾、合計7種類にも上ったのです。そしてこれらの全く違う国から来た10名が英語という1つの言語を通して会話をし、ともに楽しい時を過ごしました。

自分の周りに当たり前のように異なる国籍をもつ人がいて、当たり前のように話しかけ友達になり、自分の母国語ではない言語で会話する。こんな日本では決してといっていいほど起こりえない状況は、日本との文化の差を思い知らされる瞬間となったと同時に、とても感銘を受けました。そしていかに自分がこの地球で小さな存在であるかを悟り、もっとたくさんの違う言語・考え方・文化をもった方に出会ってみたいという感情が沸き起こりました。今までに考えたこともなかったこの考えに自分でも驚きましたが、世界に対する視野が広がり、とても貴重な体験となりました。

2つ目のカーティン大学の教育現場の見学では、私と同じ理学量専攻の学生さんの様子を見学させていただきました。私が日本で通っている信州大学の1学年の生徒数が18に対し、カーティン大学ではなんと約200に上ります。10倍以上の生徒数を抱えた大学の施設の規模はやはり圧倒されるほど大きく、驚かされました。

講義にも参加させてもらうことができたのですが、そこで印象に残っているのは生徒さんのモチベーションの高さです。詳しいことは聞きそびれてしまったのですが、カーティン大学ではこの200人の中の成績上位者の何名かは、他の生徒には与えられない勉学の機会の場が与えられるということでした。

この競争制度のせいも影響してなのか、カーティン大学の生徒さんは本当に意識が高かったです。講義中では、広い講義室で200人ほどの生徒がほぼ全員寝ることなく、パソコンに向かい合いながら先生の言ったことをメモする様子が未だにはっきりと目に焼き付いています。そして先生が何か質問すると必ず誰かが発言する様子は、海外ならではだなと感じました。日本での静かな授業の様子と比べてみて、やはりもっと自分の意見を主張しなければいけないのだと痛感しました。

また、生徒さんが実際に患者さんの評価・治療を行う実習の様子も見学させていただくこともできました。私も日本で実習を行っていたので患者さんと接する機会があったのですが、実習中の彼らの姿と自分の姿を比較してみて何が違うのだろうと考えたときに、手際の良さと自信が違うということに気づきました。彼らは患者さんに対してテキパキと指示し、自分の判断にためらうことなくスムーズに治療を進めていました。患者さんに対して自信がある態度をとることができ、また実技面において手際が良ければ、患者さんにも不安感を与えません。これは患者さんとの信頼関係を結ぶことに非常に大切だと感じます。私も彼らのような態度で治療することができるように、もっと勉学に励もうと思いました。

この実習見学において、私は4人の生徒さんの実習を見学させていただいたのですが、実はこのプログラムに参加する前に「自分と同じ専攻の生徒さんに自分から積極的に話しかけ、色々話を聞いてみる。」というように心を決めていたので、その4人全員に自分から話しかけてみました。

そうして彼らと話していている際に感じたのは、日本の生徒と比べてハングリー精神が強いということです。自分がわからないことがあるとすぐに教科書を手に取り知識を確認したり先生に質問している姿を見て、また空いた時間を見つけると自

主的に友達と実技練習をするというお話を聞き、知識・技術に対する貪欲さを感じました。そして、今の日本にたりないと言われているハングリー精神を彼らの中に見たように思いました。

長くなってしまいましたが、海外で同じ分野を勉強している生徒さんと触れることで、私は自信と実技練習の大切さ、自分の目標に対して貪欲になるハングリー精神の大切さを学び、今後の将来に対するモチベーションが向上しました。

３つ目のオーストラリア観光では、日本では見ることのできない、オーストラリアの風景や街並みを楽しむことができました。パースの美しいビーチ、国際色豊かな市街地の様子、ロットネスト島のどこまでも続くサイクリングロード、賑やかな港町フリーマントル等等、すべてが本当に美しかったです。また、観光をする中で日本との文化を差を感じさせられる場面も多々あり、本当に良い経験になりました。

ここまで書かせて頂いたように、私はこのオーストラリア留学を通して本当に多くのことを体験し、学びました。

しかし私がなぜこのプログラムに参加したのだろうと振り返ってみると、その最大の理由は自分の過去を乗り越えることだったのです。

私は小学生から中学生にかけて、父の仕事の転勤によりアメリカに３年間ほど住んでいたことがありました。しかし全く理解できない言語に囲まれて生活するという環境に圧倒され萎縮してしまい、私は現地の人に積極的に話しかけることができず、友達もあまり作ることができませんでした。そのことがきっかけとなり、日本に帰国しても私の中には英語という言語に対してとてもネガティブな感情が残され、英語を話すことに自信をもてない状況が何年も続きました。

しかし大学３年生になり、オーストラリアに留学するという機会を与えられ、私は「今度こそ英語に対して楽観的になり、そして英語を話すことに対して自信をつけて帰国する。」という目標を立て、プログラムに参加することを決意しました。私にとってこの留学はリベンジだったのです。

私は目標を達するべく、２つの目標をたてました。１つ目はホームステイ先の家族と会話を楽しむこと、２つ目は、私と同じ理学療法学を専攻している現地の生徒さんに自分から積極的に話しかけることです。

私はホームステイ先の家族との会話を楽しむことができ、そして現地の理学療法専攻の生徒さんとたくさん会話をすることもできました。結果として帰国した今、英語に対してとてもポジティブになり、そして英会話にも自信がつきました。オーストラリアに行く前には考えられないほど、他の国に対して広い視野をもつようにもなりました。大げさかもしれないのですが、このプログラムを経て過去５年間のしがらみが消えたとともに、私にとって世界が広がったように思うのです。このような最高の留学となったのは、自分自身で目標をたてたこともありますが、それ以上にこのような機会を与えてくださった学校の関係者の方々、両親・祖父母、同じ専攻のかけがえのない友達、そして現地で出会うことのできた素晴らしい方々のおかげです。感謝してもしきれないですが、この気持ちを忘れずに、今回の留学で得たことをこれからの糧にして、自分の将来に活かしていきたいと心から思います。

作業療法学専攻２年
13M1402F　上田　勝也

今回のCurtin大学の短期研修に参加するに際して、私は語学力の向上と海外の医療分野を知ることで視野を広げることを目的として参加しました。初めての海外という事もあり、英語でのコミュニケーションをはじめとして、食事など様々な事が不

安で仕方ありませんでした。しかし、様々な方の協力を得て、不安は消えていき、最後にはこのプログラムに参加して良かったと感じることが出来ました。

オーストラリアに到着し、学校でのオリエンテーションを受け、ホストファミリーの家に行きましたが、ホストファミリーは温かく迎え入れてくれて、オーストラリア到着後に感じていた不安もいつしかあまり感じなくなっていました。

ホストファミリーの家に存在する家庭のルールを教えてもらう中で、シャワーは2分しか使ってはいけないと教わり、オーストラリアにおける水の貴重さを痛感させられると共に、日本での自分の生活を省みるいい機会でした。ホストファミリーはインド系の家庭で、プログラム中の夕食は毎日必ずカレーでさすがに辛かったですが、お母さんと一緒に料理をするなかで様々な文化の違いを知ることが出来てとてもよかったです。

プログラム1週目はオリエンテーションを始めとした、オーストラリアの文化を学びました。英語の発音に関しても、オーストラリア特有の発音や言い方があることを学べてとても興味深かったです。金曜に行ったFremantleも、先住民のアボリジニーが吹くDidgeridooという楽器の難しさに悪戦苦闘しながらも、オーストラリアの歴史について学ぶ事が出来ました。Fremantle doctorと称される、Fremantleに吹いている海からの潮風も大変気持ち良く、海岸でこのままゆっくりしていたいと思いました。

特にこの1週目で印象に残っているのは、Curtin大学のOT学生との交流でした。今回は一人一人に現地学生がついてくれて、慣れない生活で感じる不安や緊張を和らげてくれるように、レクリエーションやお茶会を開いてくれるなど、Curtin大学の先生方や学生の優しさに救われました。また、施設見学においても、実際の授業の様子を見せてもらったり、OTならではの自助具やベッドなども、現地学生の説明のもと、見させて貰いました。

授業では、現地学生は積極的に質問や発言をしている様子が多くみられ、また授業も単に生徒が一方的に講義を聞きノートをとるのではなく、1つの課題に対して生徒数名でいくつかグループを作り、協力しながら実際に身体を動かして行なう授業が行われており、この様な授業内容であれば、学生は更に積極的に授業に参加するのだと思いました。加えて、OT関連の専門図書や学習用品もかなり充実しており、勉強する環境としてはかなり良いと感じ、Curtin大学で勉強してみたいと感じました。

案内をしてくれた学生も、自分の余暇時間があれば一人で実習室で勉強したり、友達と一緒に実技に向けた練習をすることなどを聞き、将来のために一生懸命に勉強する姿に感動すると共に、自分の甘さを痛感させられる機会となりました。Curtin大学には、優秀学生は院生レベルのようなより高度な授業を受けられるという制度があり、この様な制度であれば学生達はより勉強するのだと感じました。

また、お茶会では、楽しく色々な話しをしたりして、文化は違えど学生が抱えている不満は一緒なんだと感じることもあって、大変良い時間であったと思いました。

プログラム2週目は、実際にCurtin大学の専門の授業に参加しました。参加したのは1年生と3年生の授業であり、3年生では学生同士がペアを作り、臨床を想定したものでした。先生の英語は速く、聞き取るのがやっとでしたが、実際に現地学生とペアを作り、一緒になって勉強出来て大変貴重な体験でした。ペアとなった学生もわかりやすい英語で、ゆっくりと話してくれたので、楽しく授業を受けることができました。また驚いたのは現地学生は自分の行なっている所を映像として記録し、後で確認をして次回の授業に生かしていくという事を行なっており、自分の欠点などを発

見することが出来るとても良い方法であると感じました。

1年生ではOTの基礎となる面接についてディスカッションをするという授業であり、1年生の初々しさを感じるとともに、熱心に授業に参加している学生を見て、自分も頑張らなければならないと感じました。

また2週目はCurtin大学で日本語を学んでいる学生との交流があり、お互いに会話にぎこちなさはありながらも、様々な文化を共有するとても楽しい機会でした。英語の授業にも参加したが、日本人が自分1人だけということでかなり不安はあったものも、他の国の学生が気軽に声をかけてくれたりして楽しみながら授業を受けることができました。

授業内容がユニークで、3人ペアを作り、飲み物を題材として自社を設立し、どのように営業・販売をしていくかというものであり、英語の言い回しや文化の違いに苦労はしながらも一緒になって考え、最後にはスピーチをしてとても緊張したが、文化の違いを知りながら、一緒になって1つの事を考えていく授業はとても楽しめました。

3週目は病院やOT関連の施設を見学するというもので、様々なことを学ぶことが出来ました。1日目に行ったリハビリテーション病院は、歴史ある病院であり、プールを用いたリハビリテーションを見させてもらい、日本ではあまり目にする事が無かったので、良いものを見ることができたと思いました。設備も十分に揃っており、患者に対してより良い医療を提供できるなと感じました。

3日目に行った、発達障害の子どもを支援する施設では、実際にCurtin大学のOT学生が臨床実習をしている所を見ることができ、提供している作業療法の違いなどを学ぶことが出来てとても良かったと思いました。さらに、実際の作業療法を目の前で見ることができ、作業療法を行なう上でどの点を注意しなければならないか考えながら見ることが出来て大変勉強になりました。現地のOTが子どもに対してやる気を出させるテクニックなども学ぶことが出来て、充実した体験であったと感じました。

4日目はWAISというアスリートを育てる施設を見学し、4歳くらいの子どもが一生懸命に練習している様子をみて、一流アスリートになるにはこのくらいの年齢から練習をしていかなければならないと思いました。施設自体もかなり大きく、今まで生きてきた中でこのように大きな施設は見たことがなく感動しました。また施設内には各種目に応じたワールドレコードが実際に示されており、オリンピック選手の能力の高さを改めて実感させられました。最終日の卒業式では、卒業証書をもらうと同時に達成感と寂しさを実感し、プログラムが充実して終われたのだと感じました。

全体を通して、プログラム開始前に感じていた様々な不安は、ホストファミリーや先生方、現地学生などのサポートもあって最後には全く不安を感じることがなくなりました。億劫となっていた英会話も、多くの間違いをしていくなかで自信がつき、また自分の拙い英語でも通じることが出来るのだと嬉しくなり、最終的には見知らぬ人に道順や交通機関を尋ねたりと、自分から話し掛けたりすることが出来るまでになって大変良かったと思いました。そして、わからないことを鵜呑みにしないで、わかるまで何回も聞くということを学ぶことが出来ました。以前はわからないことをそのままにしている事が多かったですが、今回のプログラムで適当な返事では相手も自分も苦労するという事を痛感しました。

最後に今回の短期留学を通して、将来OTとして患者さんが満足いくような生活支援を行なっていくためには、現地学生の様な勉強に対する貪欲な姿勢と、わからないことは自分が納得いくまで諦めないことが重要であると感じました。苦手であった

英会話も日々の生活の中で幾度となく耳にすることで少しずつ出来るようになった様に、これからの勉強に対して毎日の積み重ねが重要であると改めて実感し、努力して行きたいと感じました。今回の短期留学を通して学んだ多くの事を心に刻んで、良い OT となるために頑張っていこうと思いました。

以上、カーティン大学夏期短期プログラム

Ｖ．信州大学―ネパール連邦民主共和国

夏期海外研修保健医療スタディツアープログラム

Shinshu University, School of **Medicine,** School of Health Sciences

―Federal Democratic Republic of Nepal

2014

１．ネパール連邦民主共和国の概要

１）一般情報

1.面積　　14.7 万平方キロメートル（北海道の約 1.8 倍）
2.人口　　2,649 万人（2011 年、人口調査）　人口増加率　1.35％（2011 年、人口調査）
3.首都　　カトマンズ
4.民族　　パルバテ・ヒンドゥー、マガル、タルー、タマン、ネワール等
5.言語　　ネパール語
6.宗教　　ヒンドゥー教徒（81.3％）、仏教徒（9.0％）、イスラム教徒（4.4％）他
7.国祭日　5 月 28 日（共和国記念日）
8.通貨　　ネパール・ルピー
9.識字率　　65.9％（2011 年、国勢調査）
10.略史

1769 年	プリトゥビ大王による国家統一
1846 年～	ラナ将軍家による専制政治
1951 年	王政復古
1956 年	日本・ネパール外交関係樹立
1990 年	民主的な新憲法導入
2007 年 1 月	暫定憲法成立
2008 年 5 月	制憲議会発足

11.政体　　連邦民主共和制
12.内政
　1996 年よりネパール統一共産党毛沢東主義派（マオイスト）が武力闘争を行い、政情不安定が続いていたが、2006 年に包括和平が成立し、2008 年には制憲議会選挙を実施。制憲議会初会合では、王政が廃止され、連邦民主共和制に移行することが決定された。その後、制憲議会での憲法策定作業が難航し、2012 年 5 月 27 日、任期内に憲法が制定されないまま制憲議会が解散。2013 年 11 月 19 日、憲 法制定のための議会再選挙が実施され、2014 年 1 月、議会が開会し、同年 2 月にスシル・コイララ・ネパール・コングレス党党首が首相に選出され、同月 25 日にコイララ首相率いる第 1 党ネパール・コングレス党および第 2 党共産党 UML による連立内閣が発足した。
参考資料　http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nepal/data.html#section1

２）主な研修エリア

カトマンズ、パタンを含むラリトプール郡

（主にテチョー村、ダパケル村、スナコチ村、チャパガウン村）。

２．保健医療スタディツアープログラムの概要

1）目的

異文化での学習・生活体験を通じて、国際的視点から医療者としての態度を涵養する。

ネパール、カトマンズ市内の保健・医療現場の見学および日本人とネパール人により運営実施されている NGO 活動（ネパール歯科医療協力会）の見学や体験から、開発途上国の保健医療の現状を理解し、将来国際保健・医療を担うことのイメージを広げる。

２）目標

１．　異なる医療システムのもとでの協働のあり方を理解する。

２．　英語を使用する環境のもとで、生きた英語を修得する。

３．　他人種との交流を通して、異文化理解の一助とする。

４．　国際人としての態度を自ら育てる。

３）研修期間

平成 26 年 8 月 17 日～8 月 24 日（8 日間）

参加者出国日　H26 年　8 月 17 日

参加者帰国日　H26 年　8 月 24 日

現地活動期間　H26 年　8 月 18 日　～　H26 年　8 月 22 日　（5 日間）

４）主な研修先

NGO 活動先の テチョー村、ダパケル村、スナコチ村、チャパガウン村

GRANDE　INTERNATIONAL HOSPITAL

ANANDADAN　HOSPITAL (Leprosy's hospital)

５）参加人数

看護学　　４名（3 年生４名）
理学療法学　１名（3 年生１名）
計　５名

６）担当教員

引率：奥野ひろみ　教授
国内・学内サポート：国際交流委員会（大平、日高、佐々木、川舩(学務第二)）

７）研修費用

①研修費用概要

渡航費用（往復航空運賃）	約 140,000 円
羽田空港往復	約　13,000 円
宿泊・食費・ネパール内移動費	約　40,000 円
保険料	約　　3,000 円
ビザ代	約　　2,500 円
計	約 198,500 円

②研修支援

NGO から活動費および会議費（ネパールメンバーとの会議・食事会費など）の支援をうけた。
信州大学平成 26 年度グローバル人材育成事業による海外活動支援に応募し、採択され 5 名に奨学金が支給された。

８）リスク管理体制

平成 23 年度からは、信州大学が正会員となっている特定非営利活動法人海外留学生安全対策協議会（The Japanese Council for the Safety of Overseas Studies; JCSOS）の緊急事故支援システムに加入し、研修中の不慮の事故に対するリスク管理体制を強化した。本年度も当支援システムに継続して加入のうえ、プログラムを実施した。加えて、学生・教員全員が同じ旅行保険に加入した。

３．研修プログラムの詳細

１）研修先の概要

①Grande International Hospital

ベッド 200 床　ヘリポート完備の最先端の病院。14 階建て 0 階にリハビリ室、1~4 階が外来、5~10 階が病棟、10 階に ICU、健康診断も実施。今までタイやインドなどで治療を受けていた富裕層をターゲットにしている。

②ANANDADAN　HOSPITAL（Leprosy's hospital）

レプロシーは治療をすれば治る病気であるが、数十年前までは差別され隔離されていた。こ

の病院でレプロシーの専門的な治療が行われている。またPTによるリハビリが行われており、患者にあった義足が作られていた。ベッドは80床。手術室、分娩室、検査室などがある。58年前に設立された病院であるが院内の清潔が保たれ、患者情報もきちんと整理されていた。 外来ではレプロシーだけでなく、様々な領域の診察がされている。患者の診察料は無料であり、医療費の多くがオーストラリアやUKをはじめとする国外からのミッションから支援を受けている。

③NGO活動先のテチョー村、ダパケル村、スナコチ村、チャパガウン村

ネパール歯科医療協力会（福岡）が1990年より現地NGO（ネパール結核予防協会、ネパールWell-being）と協力して協力活動を展開している村である。

当初は、歯科治療の協力を行なっていたが、ネパールにも歯学部ができ多くの歯科医師が輩出されるようになった。そこで2000年ごろより治療から予防活動へと活動の移行が始まった。予防歯科のプログラムは小学生、中学生を対象としてのフッ素洗口、ブラッシング指導の実施を行なっている。このプログラムは学校の教員が研修を受け自分の学校のプログラムを展開している。母子保健プログラムは乳幼児の健康のために、村のマザーボランティアとともに各地区での体重測定、栄養指導、口腔内の衛生指導などを展開している。

近年働く母親が増え、子どもを保育園へ預ける母親が多くなったため、保育園での活動を展開している。

今回学生は、2か所の保育園の4歳児5歳児を対象に、食後のぶくぶくうがいと石鹸を使っての手洗いの実践の健康学習会を企画・立案し実践した。

Grande International Hospital

ANANDADAN HOSPITAL (Leprosy's hospital)

２）研修日程

Date		
Aug. 17. 2014	SUN	00:20-04:50 Haneda-BKK TG661 10:15-12:25 BKK-KTM TG319 PM Meeting with Ms. SARITA (NGOs s taff) and Dr. Amit
Aug. 18.	Mon	10:00 Meeting with NGOs staff(COHW member) 11:00Meeting with NGOs staff(Mother member) 12:00 Visit to Techo Village. 13:00 Visit to Patan
Aug. 19.	Tue	10:00 Practice gargling and washing hands at Deep Marah nursery 14:00 Visit to Grande International Hospital
Aug. 20.	Wed	10:00 Practice gargling and washing hands at Sent pole nursery 11：30 Visit to Health Post at Chapagaun village. 13:00Visit to woman’s empowerment program at Techo Village.
Aug. 21.	Thu	10:00 Visit to Leprosy’s hospital at Chapagaun village.
Aug. 22.	Fri	holiday
Aug. 23.	Sat	13:30-18:15 Kathmandu-BKK TG320 22:45 BKK-Haneda TG682
Aug. 24.	Sun	Haneda 06:55

子どもたちに手洗いプログラムを実際に学生が行っている様子

３．学生アンケート

１．出発前の準備

①費用の捻出

	N
家族が全額負担	0
自己資金のみ	2
自己資金と家族の支援	3

②渡豪前の自己学習

	N
自己学習した	3
何もしなかった	2

③プログラムの発表時期

（4 月の新入生・在校生オリエンテーション）

	N
適切	5
不適切	0

④参加申し込み締め切り期限

	N
適切	4
不適切	1

⑤オリエンテーション時期・回数

	N
適切	4
不適切	-

⑥オリエンテーション内容

	N
適切	4
不適切	-

【事前学習した内容】

・少しだけネパールの国について自分の興味のあるネットのページ・記事を読む程度
・ネパールについての基礎知識、簡単なネパール語
・ネパールの状況、ネパール語、英語
・ネパールの経済状況、医療の問題

【事前学習が必要と感じた内容】

・ネパール語。
・ある程度、ネパールの医療のいい点と課題点を知っておけばよかったと思った。
・英語を勉強しておけばよかった。

【④参加申し込み締め切りのコメント】

・不可能かもしれませんが締め切り前に渡航日が決まっていたら　とてもありがたいです。

⑤オリエンテーション時期、⑥オリエンテーション内容へのコメントは特に無し

【事前学習した内容】

・ネパールの国について
・簡単なネパール語
・ネパールの状況、ネパール語、英語
・ネパールの経済状況、医療の問題

【事前学習が必要と感じた内容】
・ネパール語
・ネパールの医療のいい点と課題点
・英語を勉強しておけばよかった。

【④参加申し込み締め切りのコメント】
・締め切り前に渡航日が決まっていたら　とてもありがたいです。

【参加動機】
・途上国における医療や保健について興味があったから。
・１年生の時に国際医療協力論を受講し、奥野先生のネパールでの活動について知り、興味をもったことが今回ネパールでの研修に参加することになったきっかけです。また、私はもともと発展途上国での支援に非常に興味がありましたが、実際にそういった国に行く機会がなかったので、今回いい機会だと思い参加を決めました。
・以前から JOCB や JICA の活動に興味があり、説明会や経験者の体験談などを聞きに行っていました。まだ医療職としての資格もない学生の状態で短期で、かつ安全で、医療関係の見学や活動も出来、自分が将来この方面に向いているのか判断するためにとてもいい機会だったので参加をしようと思いました。
・将来、看護技術を通して海外支援することに興味があり、実際にＮＧＯは現地でどのような活動をしているのか、また開発途上国の医療のレベルはどのくらいなのかということを見たいと思ったから。
・以前から国際協力に関心があった。また、奥野先生の講義や長年のネパールでの活動に興味を持ったので是非参加したいと思った。

２．研修コースについて
（１）印象に残った見学先
・レプロシーの病院
：Anandaban　Hospital
―この病院はハンセン病の専門の病院として設立されましたが、今はハンセン病だけでなく総合的な病院として地域に根ざした医療を行っていたことに非常に感銘を受けました。ハンセン病の患者さんが退院した後にも安心して日常生活ができるように病院の施設内に技工室などの施設があったことにも驚きました。
―間近で患者さんのことを見ることが出来、院長先生が一人一人の患者の病態について説明してくださりその治療法とかをわかりやすく教えてくれた。医療者と患者との距離が近く、この病院が地域の人や患者にとってとても重要な存在であるということが見学していて分かった。「この病院のような場所で働きたい」という目標を持てたということもあり、この見学先が一番印象に残っている。
―全く環境の異なる病院であったが、それぞれで働く医療従事者がしっかりとした信念を持って勤務していることに感動した。
―ネパールは日本と比べてしまえば、医療や経済など遅れをとっているが、限られた環境の中で自分たちに何ができるのか常に考え、たくさんの人々と協力し合っている姿がとても印象的だった。
：Grande　Hospital
－地域の様子、地域住民の家など

ーヘルスポスト

（2）よかったこと

＜海外の医療について学習できた＞

・いままでいくつか開発途上国に行ってボランティアをしたりすることもあったが、こんなにも医療的な視点で、公衆衛生学的な視点でその国の色々な側面を見れてとてもよかったし、先生からもたくさんのお話をしていただき、とても勉強になった。

・ネパールでは学校で子供たちと共に手洗いやうがいを行いました。この時に、私たちだけでなく、現地の方も協力してくださったおかげでプログラムを無事行うことが出来ました。このことを通して、国際協力や支援を行う際には、自分たちだけで一方的に行うのではなく、現地の人々と共に行うことで継続していけるのだということを体験することが出来ました。一週間という短い間でしたが、ネパールという国のことを理解することが出来て本当に良かったです。

・村のヘルスポスト、カトリックからの支援のあるヘルスポスト、山中の病院、最先端の医療を取り入れている病院、など幅広い見学先に行くことができ全体的にネパールの医療事情を感じることができたと思う。

＜異文化体験＞

・ネパールの一般の方々の生活と、富裕層の方々の生活を両方見ることができ、幅広い視点で国の状況を捉えるのに役立った。

＜英語力の成長＞

・英語が分からず、コミュニケーションをとるのに控えめになってしまった。現地のスタッフのお話も英語で内容を理解するのに大変苦労した。

＜自分の変化＞

・またコースを通して１人での活動ではなく「チーム」として行動していたので、同学年の多専攻の学生と関わることができ、情報共有をしたり貴重な時間を共にすることが出来た。１人では何も出来ないということを学んだ。今年から看護学専攻以外の学生も参加可能になったことをとても有り難く思います。

・私は近頃、恵まれすぎた日本にいると、多くのことが当たり前になり、どんどん新しい知識や物を得ようとしてしまうことに疑問を持っていた。ネパール研修を通して、限られた環境の中でも、人々が昔から培ってきた暮らし方や知恵などを大切にしながら、その生活を継続していくことが重要だということを実感した。

（3）困ったこと

・自分の体調管理の甘さで少し後半で体調を崩したこと。

・コンセントの形状が違うのでプラグと変圧器を持って行くべきだった。

・ドライヤーを持って行くべきだった。

（4）要望他

・今回本当にいい経験が出来たので、今後も続けてほしいです。

・病院見学では、実習のように１人１人現地の看護師さんなどについて実際に半日くらい患者さんの治療などを見られれば技術の違いなども見られると思った。

・現地でのホームステイをし、実際の生活をもっと詳しく実感してみたい。

３．研修が与えた影響（自由記載）

・書ききれませんが、行く前と行く後では考え方や見方がとても変わったと思います。今後も国際的に、またネパールのような国に行って関わっていけるといいなと思っています。今まで他の国にも行きましたが、その国々で見たことが色々結びついて、とても深い学びができました。ありがとうございました。

・今まで発展途上国で働くことには興味はありましたが、あまり現実的には考えられていなかったように思います。しかし、今回の研修を通して私が将来「やりたい」と思えることが少し見えるようになったと思います。今後どうするかはまだ決まっていませんが、今回の経験をぜひ生かしていきたいと思います。

・今回が初めてのいわゆる”発展途上国”訪問でした。しかし、発展途上という見方が変わりました。人は暖かく、賢く、周囲の国に追いつく為にとても努力していて、自分自身の考えを強く持っている方々に多く出会いました。ネパールで出会った多くの方々の「ひととなり」に強く感銘を受け、この方々に負けないような人格、技術、知識、経験を得て行きたいと思い、学習意欲が非常に高まりました。また知らないことがとても多かったので、今回学んだことを日本にいる友人や後輩たちと共有していけたらいいなと感じました。

・今回の活動を通して、国際協力とは一方的に知識を与えるのではなく、現地の人たちと一緒に協力を得ながらしていくものだということが分かりました。いつか、世界で看護を提供したいと考えているので、このことを学ぶことが出来たということはおおきいと思います。また自分の思い描く看護師になるためには、自分の考えていることをちゃんと言葉で表現できるようにならないといけないという課題も見つかりました。たくさんのことを経験し学ぶことが出来たので、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。

・ネパール研修を通して、国際協力にさらに関心を持った。今回一緒に参加したメンバーのように、同じ関心を持つ人々とこれからも勉強会などに取り組んでいきたいと思った。また、後期からは語学をもっと学習していきたいと考えている。

４．研修に対する満足度

	悪かった	どちらともいえない	よかった	大変よかった
①実施時期について			２人	３人
②期間について			１人	３人
③コースの構成について			１人	４人
④研修先のスタッフの対応				５人
⑤信州大学教官の対応				５人
⑥全体としての評価			１人	４人

５．学生レポート

理学療法学専攻　３年
12M1305A　川越　美嶺

今回ネパール夏期研修に携わることができ、多くの経験を積み、また文化の違いを体感し、医療や教育・生活などの現場を見学することができたのも、この研修を計画してくださった先生方、これまでにこの活動を継続されてきた現地スタッフの方々、現地で私たちをサポートしてくださったネパール人の方々、家族、一緒に研修に参加した看護学専攻の４人のメンバー、そして奥野先生のおかげです。心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

１週間で私がネパールで得たものは、日本にいて学ぶだけでは分からないことばかりで、言葉や写真だけでは表しきれません。今回のレポートでは①ネパールの環境・社会、②ネパールの医療現場、の２点について主に書きたいと思います。

～①ネパールの環境・社会～

ネパールに着いてまず感じたのは、空気が埃っぽく、排気ガスが多いということです。②ネパールの医療現場でも述べますが、ネパールの診療所の患者記録の中で最も多い内科的疾患名が「喘息」です。マスクをしているネパール人を多く見ましたし、私自身もマスクをしていないとすぐに鼻の穴の中が真っ黒になり、喉の不快感・違和感を感じました。自動車、オートバイが大量に行き交い、日本の自動車に比べて排気ガスの色は黒く異臭がするように感じました。これらの公害はどの発展途上段階にある国にもあることだとは思うので、自動車やオートバイ等のメカニズムの技術が向上し、メンテナンス方法などが一般にも普及するようになれば改善されるのではないか、と思いました。

また、交通整備も整っていない様子が伺えました。すべての自動車やオートバイが車線も関係なく並走し、自動車には人がはみ出すほど乗っており、オートバイも４人乗りをしていたり運転手以外がヘルメットをかぶっていない、信号が無く警察官が交通整理しているが出来ていない、信号があっても付いていない、道路が舗装されておらず土のままでデコボコしていたり、深い水たまりがあったり・・・といった状況でした。

後でも述べますが、ネパールの理学療法対象者の大半が「交通事故」だそうです。歩行者の横断も困難で、自動車などのルールも細かく定められていないので交通事故が多いのも必然的のように思われます。またホテルで日本から来た道路整備会社の方々のお話も伺いましたが、他国の技術者たちが整備されたきれいな道路ではスピードを出しすぎてしまい、さらに事故が増え、その道路が「キルロード」と呼ばれるようになってしまったといいます。この問題は、道路を整備し信号を設置するだけでは変わらないと感じます。

今日まで交通ルールが緩かった環境で運転してきたネパール人に、明日から法律や制度が変わったから法廷速度を守ってください、信号を守ってください、交通ルールを覚えてください、と教えたとしても浸透するには長い年月がかかると思います。字を読めない人が多く国民全員に交通ルールを教えることは困難だと思います。他の人が守っていないのに数人が守っても事故は減らない一方なので全員が同じルールで動けるようにならなければなりません。ですが、現状として交通渋滞や交通事故がこれほどまでに問題となっているので、長い年月がかかっても変えていかなければならない点の１つだと思います。

次に、ネパールの「電気」に関してです。ネパールでは毎日計画停電が行われており、私たちの止まったホテルでも電気が使用出来る時間は一日に3~4時間が二回ほどでした。これに関しては、日本でも東北の震災の際に行われていたので予備知識がありました。環境の為にはとてもいいことですが、産業の発展の遅延因子になっているのではないか、とも思いました。スーパーのアイスクリームは溶けてしまって

いたり、冷蔵庫の食品の衛生面も悪く、しかし「仕方が無い」といった状況でした。各家庭で発電しているところもありましたが、電気すら通っていない家庭もあり、企業や生活水準の向上の基盤を作る為にはまず何よりも第一に「電気」と「水」というように感じました。

「水」に関しては、ネパールでの生活において最も困った印象があります。私自身、韓国、アメリカ、カナダ、オーストラリアに長期滞在していた経験があり、特にオーストラリアでは水不足が深刻で節水には慣れていましたが、それでもその水はきれいでしたしトイレも水洗でした。ネパールでは、水道の蛇口から出てくる水は完全には浄化されておらず、またトイレも水がまったく出てこなかったり、所謂ぼっとん便所であったり、と水の利用が困難でした。海はありませんが山が多く、雨も降る国なので、ダムや浄水場、下水処理場などの技術の向上も必要だと思いました。

社会面では、最近では和らいできたもののカースト制度のある国で貧富の差がとても大きいと感じました。今回は富裕層の方々のためのグランデ国際病院や、一般の方々の診療のためのヘルスポストなどを見学させていただきましたが、医療面の格差も日本よりはるかに大きいと感じました。

今回お世話になったアミット先生はカーストで２番目くらいの階級だそうで、ご家庭は３階建てでトイレやお風呂もきれいで、お手伝いさんも２人いてお子さんの学校もしっかりした教育を受けていました。その少し下の階級だというサリタさんのご家族も、弟さんが海外の大学に通っていたり、行きつけだというレストランも外国人の方が多くいるような場で、お子さんたちも中学生で英語が話せるなど教育水準が高い様子が見られました。

一方で、ヘルスポストなどでお話をした方々の中には英語が話せなかったり、字が読めない方々などもいて、貧富の差が教育の差にもなることを実感しました。さらには生まれた家庭の階級で生活や仕事が決まってしまうというのも現状でした。

私たちの泊まっていたホテルで働いていた方々の数人と仲良くなりましたが、やはり能力だけではなく階級によって差があると感じました。“シュレスタ”という名字の女の子は、古くは王族だったそうで来ている服もファッショナブルで、海外旅行にも行っていると言っていました。フロントで働いていた１人の“タマン”という名字の男の子は、タマン族というネパールでは少し変わった民族で、自分と同じ名字の人とは結婚してはいけないという決まりがあるそうです。タマン族はカーストでは普通ですが、海外でも活躍するなど自由な民族だそうです。

一方で“タカーリ”という名字の男の子は、英語の能力や人間性や外見もその２人と比較してもハイスペックだったのに対し、その２人からは子分のようにあしらわれ、特に反抗もせず言いなりになっている様子がみられました。チベット系の山岳地帯で農耕牧畜をしている民族で、大学に行くお金もなくアルバイトでお金を稼ぎながら、ちょうど奨学金を日本から借りられたところだそうでした。このように、能力があっても生まれた階級が低いとこのような扱いの差があるということに心が痛みました。

～②ネパールの医療現場～

次に、医療に関してですが、ネパールの内科的疾患で多いのが①喘息、②高血圧、③女性の糖尿病、だそうです。理学療法対象疾患で多いのは①交通事故、②山岳事故、だそうです。これらの問題は、医療従事者が患者さんに対応するだけではなく前にも述べたように、社会制度や環境を整備しなくては改善されないと思います。整備は出来ても、制度化しルールとして人々に認識されるためにはとても長い時間がかかります。

日本との医療の違いで最も感銘を受けたのは、ライ病患者さんのための病院での理学療法士の先生のおっしゃっていたことです。ネパールの一般の方々のための病院は他国から援助を受けているところが多く、患者さんの医療費負担は無料だそうです。そのため、日本のように病院が儲けを考えること無く純粋に患者さ

んに患者さんのためになる治療を行っており、リハビリテーション室に通わなければ受けられない治療よりもご自宅で自分で出来るようなホームプログラムの指導をメインに理学療法を行っているそうです。そのため理学療法室も質素なもので、平行棒が外に置いてあったり、訓練器具も充実していませんでした。しかし理学療法士の先生の治療目的は院長先生の言っていたものに沿っていて、病院全体として同じ目的を持って治療を行っていることが素晴らしいなと感じました。

腱移行術の説明等もドクターと同レベルの説明を理学療法士の先生がしており、知識や技術は日本と同等だと感じました。日本ではマニュアル的にリハビリを行っていてなぜそのプログラムをやるのか説明できない理学療法士さんも多いと思うので、そのネパールの病院の理学療法士の先生が手術方法やそのプログラムを行う理由まで英語で説明してくださったことにとても感動し、もっと勉強しなくてはいけないな、と感化されました。

ネパールの方々のひととなりはとても素晴らしいもので、私たちに暖かく接してくださり、私はネパールが大好きになりました。また機会があったら今度はネパールに恩返しが出来るようにネパールの方々が今困っている問題の解決に貢献できる技術や制度を持ち込み、もっと多くの方々を対象に関与できたらいいなと心から思いました。

看護学専攻　３年
12M1156B　藤富絵里香

私は高校生の時のマーシャル諸島での体験をきっかけに、何かできることはないかと高校生ながらに考え、将来JICAなどを通してなにか保健・公衆衛生を行いたいと思っていた。今まで、興味がありボランティアを始め、海外に行ってきたのだが、今回ネパールでNGO活動をされている奥野先生とご一緒させていただけるということで、保健的な勉強をしたいと考え参加を希望した。

実際、私の中でネパールという国に対して、開発途上国に行く、どんな国なのだろう、何ができるだろう、犯罪なども多い怖い世界であり、様々な面で途上しているというイメージを持っていた。しかし、たしかに治安的に悪いところもあり、日本ほど進んでいないところもあるが、とてもフレンドリーであり今の日本では薄れかけている人間の温かみも感じた。

現状として、ネパールはたくさんの問題も抱えている。ネパールの公立教師の給料は月給１万円ほどであり、ネパールでは中東などの国外へ低賃金で出稼ぎへ駆り出される若者たち、それを援助しに共に行く女性がその中で強姦にあう。実際に、空港で出稼ぎに行く若者を目にすることもあった。親も騙され、よい稼ぎ場があると聞き子供を送り出した場所は売春宿。そして、インドの方へ売春へ駆り出された女の子たち、その女の子たちはHIVになり、売春宿に捨てられ、故郷ネパールに戻るために売春しつつネパールに戻る。だが故郷に戻っても相手にされずに行き場がなくなる。その間の旅路であるインドからネパールにかけて、HIVロードができるなど、たくさんの現実があった。

最近ではネパールの田舎の方からカトマンズへ出てくる若者も多く、だが就職に着けないなどの理由で神聖な川のほとりにスラム街を作り始めてしまってるようだ。先進国からの輸入品とその処理法の知識不足、分別などのゴミを捨てるという習慣の無さから道路の両脇にはゴミが山住になっており、ゴミも大きな問題になっているようだ。

そんな現状もある中、私たちが学んだことも多くあった。何より私たちが何かの援助をして満足するのではなく、その現地の人と共に学び、現地の人の習慣化を考えた上でマザーボランティアなど様々な人との関係をもち、広い視野で地域を見つめ、地域へのアプローチをすることが大切なことなのだと学んだ。

私たちはネパール滞在期間の内２日間にかけて、現地の幼稚園で手洗いや嗽を通して子どもたちと交流する機会があった。その必要性や、日常的に習慣化することの大切さを片言のネ

パール語ではあったが懸命に伝えた。どう語りかければもっと重要さが伝わり習慣的に継続してもらえるのだろうか、アプローチの難しさを感じた。

そんな私にとって何より心強かったのは色々にアドバイスを頂いた奥野先生はじめ、コーディネートして毎日を一緒に過ごしてくださったサリタさん、園の先生方、マザーボランティアの方々の存在だった。その他にも、英語からネパール語に通訳し、ネパール語の発音を懸命に教えてくださったロビーのスタッフの方、私たちを温かく迎え入れて頂き、子供たちと交流の場を設けて下さり、言語面でもとても助けて頂いた。人と人との繋がり、心と心を通わせることの難しさ、信頼関係とは何かを改めて考える機会となり、なにより一人では何もできず、一緒に行った保健学科の仲間をはじめ周りの人の協力があるからこそ、手洗い嗽が幼稚園で無事に行っていけたことだと改めて思った。

対象は私たちとコミュニケーションの難しい子どもたちだ。先ず私たちに興味を持ってもらうこと、手洗い嗽などケア自体楽しいものであることを伝えること、その上で今後習慣化してもらえるよう家でのことも考える。短時間ではあったが、信頼関係が生まれ心と心の繋がりの中でこそ成果が得られたような気がする。また、これまで活動してこられたNGOの方々や奥野先生の築かれた深く大きな関係性を痛感した。何かをするということは国内のみならず海外では更に、信頼し、される関係というのが重要になってくる。途上国において異国の者がやってきて日本人が信頼される存在になるというのは今までの歴代の先生方の活動があったからこそなのだろうと感じ、言語的にも異国の地で最初にネパールへ行き、活動された方はどのようにその信頼関係を経たのかとても気になった。

今、日本に戻り改めて思うことは、日本で信頼することは日常で当たり前の事であり、病院でも日常近所でも友達の間でもごく身近に存在するものだが、海外でのNGOにおいても日常生活においても医療現場でも、真に信じ合うことの難しさ、そしてそれはすべての行為の土台となるとても大切なものだということを感じる。自分は本当に周囲の人と信頼関係を築けているか、自分自身に再度問いかけたい。協力・連携・信頼できる関係作り、その大切さや人々の温かみに触れ、ネパールという国から再度学ぶことが沢山あった。

帰路の空港で、タイゴルフ帰りの男性に出会った。彼らは「えっネパール行ってきたの？！あんなとこ、今世界で3番目くらいに貧しいところなんでしょ？！よく行くねぇ～」と私たちに語った。タイの観光の事をはじめたくさんのことについて教えてくださったが、私にとってその第一声がとてもショックであった。タイやインドなど東南アジアには売春してる子供たちがたくさんいるという現実を聞いていたが、その利用してる有名な観光客は日本人の男性が多いという事実とその男性たちが重なり、色々なことを考えさせられ悲しい気持ちになった。

日本でも、この男性と同じようなことを言う友達が私の周りにもいる。貧しいとか貧しくないとか関係なく、それぞれ人のぬくもりや日本とはまた違ったいいところを沢山持ってる。興味がなければ難しいことかもしれないが、そのセリフを言う前に、貧しいということではなく他のすばらしい部分も、行って、国や人に触れて・見たあとでまた再度考えてほしいなと思った。

ネパール滞在期間中、二つのタイプの病院や村のヘルスポストへ訪問し、見学させていただいた。

まず病院では、ネパールのトップであるgrande international hospitalとイギリスやオーストラリアなどからの支援でできたanandaban hospitalである。grandeではさまざまな幅広い病気の治療ができ、手術室や医療器具、救急やドクターヘリをはじめすごく先進的な医療が集まっていた。また、個室から多床室までさまざまなタイプの病室があり、総合病院という形だった。とても素晴らしい病院で、この病院を先頭にネパールの医療が更なる発

展へと向かう兆しが見て取れた。

逆に、anandaban hospital では leprosy の病棟や外来、一般病棟があり、ここでは外国の支援も見れた。環境は grande ほど立派ではなかったが、とても温かい病院で医者と看護師、患者の近さ、ぬくもりを感じた病院だった。

わたしは以前まで日本でもリッチな人だけに提供するような病院医療はあんまり気が向かなかった。だが、国のレベルを上げるために割とリッチな人を対象とした病院と、国民全てに対するあたたかくて市民的な治療費無料の病院、それぞれの病院がそれぞれ大切であり、お互い良いポイントがあると改めて感じた。

さまざまな国に行き感じたこと、考えたことがある。何がその国にとって大切な事なのだろう、その国にとって必要な事なのだろう、何かできることはあるか、と。色々な問題や現状を見ると行きつく先は政治的なことであったり、社会学的な事や金銭的な事、文化的な事であったりする。その大きな問題解決への答えはとても難しく、完璧なゴールへ行きつくのは困難だ。これらのことを考えていると、気持ちが遠くなることもあった。だがこのネパールに行き、ゴールにはなかなか到達しがたいだろうが、色々な人と出会い話しているうちに自分の方向性が見えてきた気がする。

先生や向こうでお世話になった方々、女性の中心に立ってエンパワメントを謳っている方など、たくさんのパワフルな人・みんなをまとめていくかっこよい・たくましい・kindly な女性たちに出会い、話し、たくさんのパワーと勇気、もったいないくらいのエネルギーをネパールでいただいた。このエネルギーをいつまでも胸に、また様々なことを考え経験し行動に移していける看護学生になろうと思った。

村のボランティアのメンバーとの話し合いにも参加。

研修地の皆さんと記念撮影

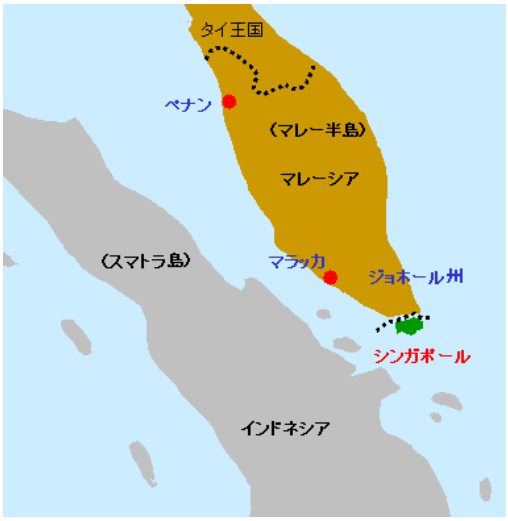
以上、ネパール夏期短期プログラム

Ⅵ. 信州大学―シンガポール共和国

夏期海外研修保健医療スタディツアープログラム

Shinshu University, School of Medicine, School of Health Sciences

―Republic of Singapore



2014

１．シンガポール共和国の概要

１）一般情報

1. 面積

約 716 平方キロメートル（東京 23 区と同程度）

2. 人口

約 540 万人（うちシンガポール人・永住者は 384 万人）（2013 年 9 月）

3. 民族

中華系 74%、マレー系 13%、インド系 9%、その他 3%

4. 言語

国語はマレー語。公用語として英語、中国語、マレー語、タミール語。

5. 宗教

仏教、イスラム教、キリスト教、道教、ヒンズー教

6. 略史

1400 年頃 現在のシンガポール領域にマラッカ王国建国。

1511 年　マラッカがポルトガルに占領され、マラッカ王国が滅亡。

マラッカ王国の王はマレー半島のジョホールに移り、ジョホール王国を建国。それに伴い、ジョホール王国によって現在のシンガポール領域が支配される。

1819 年　英国人トーマス・ラッフルズが上陸。ジョホール王国より許可を受け商館建設。

1824 年　正式に英国の植民地となる。

1832 年　英国の海峡植民地の首都に定められる。

（1942 年～1945 年）　（日本軍による占領）

1959 年　英国より自治権を獲得、シンガポール自治州となる。

1963 年　マレーシア成立に伴い、その一州として参加。

1965 年　マレーシアより分離、シンガポール共和国として独立。

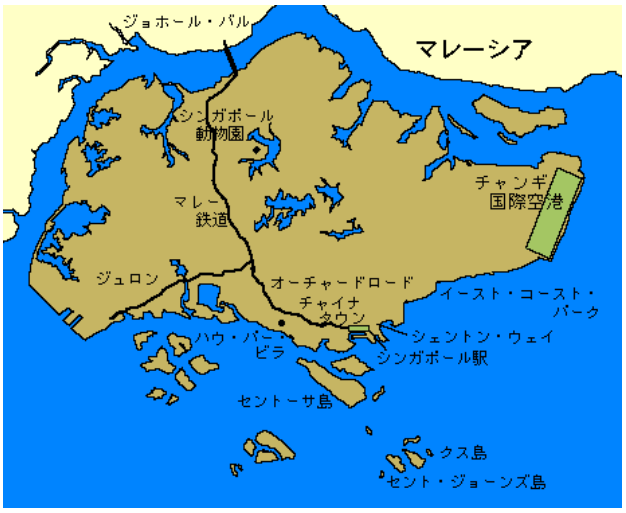
7. 政体

立憲共和制（1965 年 8 月 9 日成立）（英連邦加盟）

8. 元首

大統領（任期 6 年）、

他、参考 URL 参照 http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html#01



2)主な研修エリア
チャイナタウンを基点に、研修先は地下鉄で10分～30分程度。
活動エリアはシンガポール全体。

２．保健医療スタディーツアープログラムの概要

１）目的
異文化での学習・生活体験を通じて、国際的視点から医療者としての態度を涵養する.
シンガポールでは、シンガポール市内およびシンガポール総合病院の保健・医療現場の見学や体験から、開発途上国の保健医療の現状を理解し、将来国際保健・医療を担うことのイメージを広げる。

２）目標
①異なる医療システムのもとでの協働のあり方を理解する.
②英語を使用する環境のもとで、生きた英語を修得する.
③他人種との交流を通して、異文化理解の一助とする.
④国際人としての態度を自ら育てる.

３）研修期間
平成26年8月22日～9月1日（11日間）
参加者出国日　　H26年8月22日
参加者帰国日　　H26年9月 1日
現地活動期間　　H26年8月23日　～　H26年8月31日　（9日間）

４）主な研修先
市内の複数種類の総合病院や教育機関を見学し、専門職等の実際や学習環境を知る。
・SGH: Singapore General Hospital
・NUH = National University Hospital
・NYP = Nanyang Polytechnic (School of Health Science)

５）参加人数
看護学　　4名（3年生4名）
検査技術科学　　3名（3年生3名）
合計　7名

６）担当教員
引率：Go Ah Cheng　准教授、山﨑明美　講師
国内・学内サポート：国際交流委員会（大平、日高、佐々木、川舩(学務第二)）

７）研修費用

①研修費用概要
・往復航空運賃　　約85,000円（サーチャージ込）シンガポール航空
・成田空港　バス代（片道）　　約10,000円

・電車（片道）　成田エクスプレス/スカイライナー/リムジンバス等＋特急/高速バス
約 7,000 円～10,000 円
・宿泊代　1 泊約 3,000 円×10 泊＝30,000 円
・滞在費（交通費・食費・自由時間活動費・土産等）　約 30,000～50,000 円
・旅行保険　約 4,000 円
合計　約 175,000 円（平成 26 年 9 月現在）

②研修支援
7 名の参加者が信州大学平成 26 年度グローバル人材育成事業による海外活動支援に応募し、採択され奨学金が支給された。

８）リスク管理体制
平成 23 年度からは、信州大学が正会員となっている特定非営利活動法人海外留学生安全対策協議会（The Japanese Council for the Safety of Overseas Studies; JCSOS）の緊急事故支援システムに加入し、研修中の不慮の事故に対するリスク管理体制を強化した。本年度も当支援システムに継続して加入のうえ、プログラムを実施した。加えて、学生・教員全員が同じ旅行保険に加入した。

３．研修プログラムの詳細

1.研修先の概要
１）シンガポールの教育
今回訪問したシンガポールは国際都市であり、その教育や医療は国際的かつレベルが高い。その理由として、シンガポールは資源を持たない小国であることが挙げられる。資源の乏しいシンガポールでは、人々の働きによって何らかの「価値」を作り出さなければたちまち貧しくなってしまうという危機感がある。グローバル化が進む中で、全世界的に有力な企業の拠点をシンガポール誘致するというのは非常に重要なことになっている。そのような産業的な要請の流れの中で研究者・専門家の誘致も戦略的に考えられている。

加えて、複数の民族が共存することから、国を維持するために教育は大変重要な課題である。国家予算に占める教育費の割合が防衛費に次いで第二位であり、政府が教育に重点的に投資して　いることがわかる。

シンガポールでは小学校から厳しい選抜が行われ、優秀な生徒をエリート教育するシステムが整っている。シンガポールの基本的な教育制度は、小学校（Primary School）6 年、中学校（Secondary School）4 年、ジュニアカレッジ（Junior College）2 年、大学（University）4 年というコースである。進学するたびごとの選抜システムが特徴的である。シンガポール政府のホームページに詳しい記載がある。
さらに、大学、中でも Ph.D コースの大学院生や研究者に関しては、海外から研究の場を求めてシンガポールへと来た方が非常に多い。また、組織のトップにアメリカやイギリスで教育を受けたトップクラスの研究者が多く、その理由の一つは、優秀な研究者が来れば、良い研究ができるだろうということのようだ。次に、英語ができることである。英語ができるというのは、単純に研究についてのコミュニケーションが英語でとれるということではなく、あらゆるコミ

ュニケーションにおいて英語を使っていてまったく不自由を感じないという意味が重要視される。シンガポール人は英語が話せるので、組織内でのコミュニケーションには困らず、欧米の研究者や専門家とのコミュニケーションにも困らないことによる様々な恩恵が見込めるということのようだ。

シンガポールの大学院は世界中の学生を積極的に呼び寄せている。奨学金制度が充実し、レベルの高い研究が出来るシンガポールには世界中から学生が集まってくる。なかでも、中国からの留学生が多い。

このようなシンガポールには、大学が３つある。シンガポール国立大学（National University of Singapore)、南洋理工大学（Nanyang Technological University)、シンガポール経営大学(Singapore Management University)である。このうちのシンガポール国立大学の病院には、2014年に訪問見学した。

大学のほかに、ポリテクニック(Polytechnic）と呼ばれる。高等技術専門学校や高等専門学校と訳される３年制の学校でdiplomaを取得できる。ポリテクニックは職業に直結するような高度な専門知識を学び、日本でいえば高等専門学校のようなものである。訪問先のNYP(Nanyang Polytechnic)がこれにあたる。　ただし、NYPの中の理学療法学科については、2014年９月入学生より大学化される予定である。

２）シンガポールの医療

シンガポールの医療は元々医療水準の高い都市であるが、さらに国策として外国の医師免許（条件付き）を認めていることで、外国人医師も多く、同時に外国人の医療従事者も多くいる。

私立総合病院の経営システムは日本と異なる。シンガポールの私立病院では、OPEN SYSTEM を採用しており、各専門医は独立した開業医として、病院内の施設をテナントとして借り受けてクリニックを開業しており、検査や処置、入院が必要な時は病院の施設を借りて行う。また、各クリニックのスタッフは医師が直接雇用しており、運営や診療方針も全てその医師に委ねられている。

公立病院は日本の総合病院と同じシステム（CLOSED SYSTEM）で医師もそれぞれの病院に所属しており、ひとつの病院で検査から治療、入院まで全て行うことができ支払いも一度で済ますことができる。

訪問先のSGHはCLOSED SYSTEMであり、NUHは、国立であるが、CLOSED SYSTEMとOPENSYSTEMの併用のようであった。

３）訪問先 SGH ： Singapore General Hospital

SGHは1821年創設のシンガポールでは一番歴史があり、最大である。と同時に、アジア圏においても最大規模であり、高度な医療技術と豊富な人材を誇る。1900年代初頭に医療と看護の学校が設立されて以降、SGHは医療教育の中心になっている。多くの優秀な医療従事者を輩出し、 国内の学部生、大学院生そして医療専門スタッフの教育に携わっている。国外からの研修生の受け入れも行なっている。

キャンパスの広さは18ヘクタール、SGHだけで８ブロックある。シンガポールでは第３次救急病院としての役割を持った最大の病院で、５つの専門領域の医療センターを擁する。

約2000床のベッド数と600名以上の専門医、約4000名の看護師、他専門職を抱え、年間約７万人以上の入院患者、約100万人の外来患者に対し、約１万人のスタッフで対応している。

35の診療科目の他、病院敷地内にある５つの専門医療センター、眼科、循環器、がん、歯科、脳血管疾患のセンター棟があり、患者は専門治療を受けることができる。

さらに、院内には、現任教育専従担当者がおり、その担当者が院内専門職のみならず、外部からの様々な研修生の対応も行うシステムが構築されており、今回の本学の研修でも担当していただいた。大規模かつ最先端の医療水準を保持しようとする院内システム、加えて、高い水準のサービス提供への誇りとそれを支える専門職現任教育システムを維持している。
http://www.sgh.com.sg/Pages/default.aspx

Singapore General Hospital

SGH：初日オリエンテーション

Singapore General Hospital

4）訪問先　NUH ： National University　Hospital

国立大学に併設する総合病院であり、成人と小児の移植プログラムを提供するシンガポール唯一の公立病院。2007 年より、循環器疾患とがんの治療を推進するセンターとして選ばれている。病院は約 1100 床、43 病棟、手術室は 29 室、総スタッフ数は約 7000 名である。また、外来は、42 診療科があり、24 時間の救急医療も提供している。

スタッフには外国から来た者も多く、看護部門では「シンガポールで働く看護師は英語ができることが前提、マンダリン（中国語）は必須なので、半年間ほど病院がお金を出して、語学を学んでもらう」そうである。夜間コースもある。中国語しか話せない患者さんは高齢者に多く、高齢化が進むシガポールでは、語学は必須能力であり、このようなシステムが各施設毎に設置されているようである。　http://www.nuh.com.sg/

National University　Hospital

NUH:リハビリルームで見学学習

５）訪問先　NYP　：　Nanyang Polytechnic（School of Health Science）

NYP は 1992 年に創設された。ヘルスケア科とビジネス科から始まり、翌年、エンジニア科や IT 科も設置され、その後いくつかの科が増設されてきた。　30 ヘクタールのキャンパスに、15000 名の学生、1300 名のスタッフを擁する。

ヘルスケアの分野には、看護、歯科衛生、社会福祉、理学療法、作業療法、診断Ｘ線撮影と放射線療法の専攻が設置されている。各学年の学生数は、理学療法・作業療法は約 100 名、看護は約 650 名。看護専攻の場合、最大規模の教室での収容人数が 280 名のため、1 学年につき同じ内容の授業を 3 回提供している。理学療法・作業療法は、2014 年 9 月入学生から、アイルランドのダブリン、トリニティカレッジとの提携による大学化が決定している（訪問当時）。

Nanyang Polytechnic

NYP：シュミレーションルーム

2.研修プログラム

プログラムの詳細は、3. 研修日程の表 1 に同じである。

研修は主に見学研修である。短時間のテクチャー受講が含まれる。SGH、NUH の 2 つの病院では、教育担当看護師がアテンドしてくれ、院内施設を終日見学した。

学生は、シュミレーション体験等では積極的に参加したり、日本にはまだ少ない部門やシステムを見たり、希望していた産科や外科、在宅看護に関連する内容などの説明を受けた。学生が分散して、患者にケアをする場面をじっくり見学するプログラムでは、学生は、各自で英語でのコミュニケーションで自ら学ぶ場面もあった。

3. 研修日程（表１参照）

表１　日程および研修プログラム

Itinerary for study tour Singapore 2014
Shinshu University, School of Health Sciences, International Programe: Short-term studying Course

date			time	activity/address	cordinator/lecturer
Aug	22			Airport-taxi from Matsumoto	
		Fri	9:00 11:10	member meet at NRT: Narita International Airport, SQ Check in Counter Dep.NRT11:10 SQ637	
			17:45	Arri. SIN 17:45 Singapore Changi International Airport Arri.Hotel	
	23	Sat		Aquarium :AM WaterPark :PM Resorts World Sentosa 8 Sentosa Gateway, Sentosa Island, 098269	Optional Tour
	24	Sun		USS:Universal Studio Singapore Resorts World Sentosa 8 Sentosa Gateway, Sentosa Island, 098269	Optional Tour
	25	0	10:00	SGH: Singapore General Hospital (Tour) 1000 - Meeting at Block 4, Taxi Stand 1030 - 1130 Introduction by A/Prof Tan 1130 - 1200 LIFE centre tour (Bowyer Block) 1200 - 1400 SGH Campus tour (A&E, Inpatient Rehab Center, Rehab Center, Specialist Outpatients	Associate Prof. Celia Tan, Director, SGH-Postgraduate Allied Health Institute
	26	Tue	9:00	SGH (attachment) **For nursing students** 0900 Meet Alice Lee (Nursing staff) at Blk 7 0905 - 1030 Tour of SGH Facilities 1030 - 1200 Obstetrics & Gynaecology Center 1200 - 1300 Lunch 1300 - 1430 Midwifery / Obstetrics 1430 - 1600 Surgical & Medical wards 1600 - End of attachment	Ms Leaw Bee Leng, Nursing Department, Tel: 6326-6739)
			9:00	SGH (attachment) **For PT students** 0900 - 0930 Orientation 0930 - 1100 Gym / Spine OPS 1115 - 1230 Neurology OPS 1230 - 1400 Lunch 1400 - 1530 BOLP 1530 - 1700 Geriatrics 1700 - End of attachment	Ms Nurul Aini, Physiotherapy Department, Tel: 6321-4132
	27	Wed	10:00- 12:00	Nanyang Polytechnic School of Health Science	Ms Audrey Lim, Manager, Physiotherapy Department, Tel: 6550-1435
			14.30- 16.30	Singapore Institute of Technology Faculty of Health Science	A/Prof Alan Wong, Director, Faculty of Health Science, Tel: 6592-2092
			16:30	Night Safari 80 Mandai Lake Rd,Singapore 729826 (65) 6269 3411	http://www.wrs.com.sg/
	28	Thu		Free and rest time	

	29	Fri	9:00 13:00	NUH (attachment) **For Nursing students** 0900 – 1300 Rehab Gym (main building and NUH Medical Center) **For PT students** Attachment to PT staff (inpatients) 1300 – 1400 Lunch	Ms Alice Lim, Manager, Physiotherapy Department, National Univeresity Hospital
			14:00～ 17:00	NUH (attachment) **For PT and Nursing students together** 1400 – 1700 Hospital tour (by Nursing dept)	Ms Mok Qiu Shi, Senior Executive (Nursing Education), Nursing Department, NUH. Tel: 6772-5139
	30	Sat		FREE DAY / SHOPPING	
	31	Sun		FREE DAY / SHOPPING 20:00 Depart from Hotel by Airport Bus	
			23:55	Dept.SQ638 Singapore Changi International Airport	
Sep	1	Mon		Arri NRT 8:00	

4.学生アンケート

1．出発前の準備

①費用の捻出

	N
家族が全額負担	2
自己資金のみ	0
自己資金と家族の支援	5

②渡豪前の自己学習

	N
自己学習した	5
何もしなかった	2

③プログラムの発表時期

（4 月の新入生・在校生オリエンテーション）

	N
適切	7
不適切	0

④参加申し込み締め切り期限

	N
適切	7
不適切	0

⑤オリエンテーション時期・回数

	N
適切	7
不適切	0

⑥オリエンテーション内容

	N
適切	6
不適切	1

【事前学習した内容】
・シンガポール人の一般的な暮らしや法律
・シンガポールの医療制度やその歴史
・eALPS に山崎先生がアップしてくださった資料の中の上から 4 つを読んだ。上から 2 つ目の「医療制度と医療ツーリズムに見るシンガポールの戦略」はかなりしっかり読み込んだ。

【事前学習が必要と感じた内容】
・英語
・日本の医療制度と現地の違いを理解しておく
・自分で行く病院についてある程度調べておく
・文化も知っておく

【⑤オリエンテーション時期のコメント】
・パスポートを取得したり心の準備をするには 4 月ごろが最適だが、説明会そのもののアナウンスも 4 月に入ってからだったので、行きたかったけどいつの間にか終わってた、という人もいるように感じる。
・説明会のアナウンス(日程など)自体は春休みのうちからメールで送信したほうがよかったのではないかと私は思った。

【⑥ オリエンテーション内容】
・日程がぎりぎりまで不確定だったのはつらかった。帰省の予定を入れにくかったので。それから事前に準備しなければいけない金額とその内容をリストアップしたリストがほしかった

【参加動機】
・ホームステイの経験（複数）
・海外への興味や経験への期待（複数）
　—海外の人と交流して視野を広げたい
　—自分を成長させたい思い
・海外の医療への興味（複数）
　—海外の医療現場を見ることで自分の将来の視野を広げたい
・オーストラリアの観光への興味（複数）
・英語語学力の向上
　—自分の英語力を試したかった
　—英語を話すことへのネガティブさの克服
　—英語が苦手なので生の英語に触れて英語に対する考え方を変えたい
・専門領域の学習や施設見学等の経験
　—海外で検査技師として働いたり、医学の勉強をしたいため、今回のプログラムを通して海外の医療を少しでも学べると考えた
・プログラムへの関心・興味
　—このような貴重な経験をできる機会はなかなかない（複数）
　—信州大学に入学した時から海外留学プログラムに興味があり、大学で２年ちょっと勉強した３年生の夏に行こうと決めていたから。

―日本の医療は本当に狭い島国の中だけで完結しているように感じていて、もっと世界の様子をみて日本に取り入れられる利点を取り込む努力をすべきではないかと思っていたから。日本以外の国の医療を見てみたかった。それから単純に海外旅行がしたかった。多民族国家のシンガポールは一か所で多くの文化に触れられそうで一石二鳥だった。

―以前から海外に興味をもっており、シンガポールの研修プログラムは、私にとって期間が適切であったため

―海外の PT の現場を見たかった

―内容、日数、費用が３つの行先の中で一番自分に合うと思った

―海外への興味があったこと、と共に海外の医療を直接みて学ぶことが出来る機会はないと思い、とても貴重な体験ができると考えたからです。

―海外に行きたかった

―海外の医療を知りたかった

３）研修コースについて

①印象に残った見学先

・Health Science School

―マネキンで行うシュミレーションの完成度の高さがとても衝撃的でした。別の部屋では他の人が声などを操作しているため、より本物の患者さんと接しているような体験ができて、実践に役立つのではないかと思いました。

・SGH

―見学させてくださった理学療法士のかたがとても優しくて、患者さんには中国語で、私たちには英語で説明していて 2 か国語を操るのが格好良かったことと、病院の設備が日本よりも整っていてすごいと思った。

―とにかく何もかもが素晴らしかったです。病院の規模の大きさは勿論、その中にある施設・設備の一つ一つが最先端で、シミュレーションでの練習や服薬管理の方法などは特に印象深かったです。

―見学の初日と二日目に行ったということもありますが、広くて清潔で設備が整っていて指導者もとても丁寧だったので印象に残っています。

・NUH

―PT の方と１対１で見学させていただけたことが印象に残りました。１人だったので英語の理解が十分にできなかった部分もあったが、間近で見学でき、とても親切に教えてくださったため。

―1 対 1 で PT の現場を見せてもらえたのはよかった。

・NYP

―素晴らしいマネキンで、もっと会話がしてみたかった！

③ よかったこと

＜海外の医療について学習できた＞

・Health Science School 以外にも、ＳＧＨなどはアジアで１番の病院だと聞いて、そのような場所に行って見学したりお話を聞かせていただける機会なんてこの先ないと思う

ので、経験できて本当に良かったと感じました。
・シンガポールの病院の様々な施設を見学でき、この国の医療現場の実際を見ることができてとてもいい経験になった。
・見学させていただいた病院や大学の方が私たちを快く受け入れてくださり、親切に案内してくださったこと。
・Trinity College Dublin の見学は担当者と先生での対話が多く、あまり理解できなかった。また、新しくスタートする過程を知るよりも、スタートしてからの様子を見学できたらよかった。
・病院や大学など、いろいろな施設を見ることができてよかった。
・質の良い機械と質の良い医療従事者に出会えて、お話を聞かせていただいたことです。

＜異文化体験＞
・自由行動の日も充分にあり、行きたいところへ全ていくことができて楽しかった。ホテルで偶然インドネシアから来た日本人の子と出会い、日本は狭い、世界はやっぱり広いと実感した。
・ホテルの部屋が狭く、トイレやお風呂があまりきれいではない
・遊びの面でも有名な観光地は結構回れたので満足している。

＜英語力の成長＞
・少人数だったので、質問もしやすく、間近で施設を見学できたこと。
・平日の夜も含め、たくさんの観光スポットを回ることができてシンガポールを満喫できたこと
・先生方がフリータイムのアドバイスや見学時の通訳をしてくださったこと

＜自分の変化＞
・日常の中で英語に触れることが出来るという環境は特に良かったと思います。自分一人、もしくは自分たちだけでの行動でも、英語で会話する場面が多く、最初は通じるか不安でしたが、何とかなりという実感がわいてきました。そのことで後半になるにつれて、分からないことがあったら現地の人に積極的に質問ができるようになっていったと実感しました。
・他国の医療現場を目にするという機会は、このような大学のプログラムのようなものでなければ、ほとんど経験する機会はないと思います。よって、このようなコースがあることは、私にとって大きな価値のあるものでした。
・王道の観光地にも行くことができて良かった。自由時間も多くてうれしかった。病院の特徴を短期間で吸収することができた。患者さんと少しだけど、会話することができた。リスニング能力を鍛えることができた。

④ 困ったこと
＜英語力の乏しさ＞
・なにより英語がわからないのが致命的!!研修の講義で先生が何言ってるのか半分もわからないのはつらい。
・英語ができないとだめだと思った。行くまではジェスチャーなどで何とかなるだろうと思っていたけど、専門語もあるし、せっかく研修に行った以上、より多くのことを吸収したいと思ったので英語はできたほうがいいと思った。

・シンガポールでは英語に苦労しました。とくに中国人やシングリッシュの方の英語は聞き取りにくく、会話ができない場面もありました。
・病院や学校見学で説明してくださる方々がすごく丁寧に話して下さっているのはわかりましたが、ほとんど理解ができなくて、もっと英語がわかったらよかったなと思いました。

＜その他＞
・ホテルの部屋が狭い！洗濯物を部屋干しすると臭い！お風呂が冷たい!トイレがなんか嫌…でも慣れれば大丈夫かな
・自分が疲れていると集団行動が面倒になるので、こまめに自分だけの時間をとりたかった。
・食事があまり合わなかった。数日たてば少しずつ慣れてきたけれど最初の頃はつらかった。先生にアドバイスされて持って行ったインスタントのお味噌汁が役に立った。
・ホテルが思った以上に過ごしにくかった。安さにひかれたけど、10 日間も過ごすならもう少し費用がかかってもいいので良いホテルに泊まりたい。
・自分のガイドブックを持っていなかったのであった方がいいと思った。また、自由行動で行くところを事前にもと調べておくべきだった。
・ホテルの安さを追求しすぎたあまり、ごはん・シャワー・ベッドに難ありだったこと。英語に専門医療用語が入ると難しい。
・看護をメインで学びたいのに PT について詳しく紹介されても、なかなか理解できなかった。逆でもそうだと思った。
・フレッシュな野菜やお茶が恋しくなった。
・行きたいところは事前にチェックしておいて、詳しく友達と予定をたてておかないと無駄な時間ができる。

④要望
・PT の現場を見せてもらったが、もう少し患者さんとかかわっている場面が見たかった。
・私は神経疾患に興味があるので SGH で中枢のリハを見せてもらえたのはよかったが、基本動作練習や歩行練習などもっと具体的なリハが見たかった。
・Trinity College Dublin を見学するのなら、学校が新しくスタートして３、４年後ぐらいが良いのではないか
・トリニティー大学についてはまだ始まっていないので、始まって数年してからの様子が見れたらいいと思う。
・私立の病院がどのような感じなのかも見れたらよかったと思いました
・事前に興味のある分野をもう少し詳しく聞いてもらって、その分野を見学できる機会があればと思う。
・今回は PT の開業については見れなかったけど、それも日本との大きな違いだと思うのでぜひ見たかった。
・今回は、予定されていた保健センターの見学ができなかったことが残念でした。また、NUH では午前中ずっと同じリハビリ室での見学でしたが、もっと看護に関わった分野や病棟の見学などがしたかったです。特に、個人によって病棟の見学や病院内の見学ができた人もいたので、専攻にあった内容を学びたかったと思いました。SGH の二日目は Ns と PT が別ではありましたが、助産系に内容が偏っていたので、興味のある分野を学ぶ時間を少しあった方がより充実すると感じました。

・医学英語のミニ講座を開催しておいてほしい。できれば、専攻ごとに分けてほしい。三年生以上がいいと思う。
・マリーナベイサンズに行くなら土曜の夜などが良いと思う。
・ナイトサファリに行くのであれば、週の途中に行くのが良いと思う。その次の日が休みだったのは助かった。

4）研修が与えた影響（自由記載）

・今回は看護と理学療法の専攻だけが行ったこともあり、理学療法の見学もさせていただいたのですが、整形にも興味があったので私としてはとても興味深く楽しい場面が多かったです。また、シンガポールでは医療者も健康でなければならないという考えがあり医療者専用のジムなどがあって、このような考えが日本にも広まるといいのではないかと考えました。看護師になるのが今までより楽しみになりました。ありがとうございました。

・今後高齢化社会を迎える先進諸国の中で、日本がとる政策が世界の手本となっていくと予想している。シンガポールに限らずほかの国とも、医療についてディスカッションの窓口となる仕事ができたらと思う。普通に病院に勤務して高齢者に対する健康寿命の増進にアプローチしていきたいと考えていたけど、それだけではなく、諸外国の知恵をもらいまた日本の知恵を外国に発信していける仕事に興味を持つことができた。

・初めての海外ということもあって、すべてが新鮮で貴重な経験でした。私が医療制度を変えることは難しいが、それ以外の点で、シンガポールの人の人柄の良さなど見習うべき点は吸収して、これからの実習や臨床で活かしていきます。何より、本で見たり人から聞いたりするのではなく、実際に自分自身で見聞きしていろいろなことを感じることができたことはとても価値のある経験でした。今後の英語の学習意欲がわき、生の英語にもっと触れてみたいと思い、また、海外の医療に目を向け、それぞれの良い点を取り入れたり参考にしたりできたらなと思いました。

・英語の必要性をかなり感じた。これから先、英語の論文を読むことも多くなるので全体的な英語力が必要だと思ったし本当に実感したので英語の勉強を始めるいい機会になった。　日本のPTとの違いも知ることができて面白かった。一番印象に残ったのが、パーキンソンの患者さんに早く歩くようにPTが言っていたことで、自分の知っているパーキンソンに対するPTではないと思った。こういうことも勉強していればそのやり方が良いのか悪いのか、自分ならこうするということが考えれると思ったので、やっぱり普段の勉強は大切だと思った。今回はシンガポールのPTを学ぶことができて、とても良い経験になったが、違いを知るにはまずは日本のことを知る必要があると思ったのでこれからもっといろんなことを学んでいきたいし自己学習もしていこうと思った。

・まずは海外経験が今までなかったので、外国という日本とは違う文化・多国籍の文化に触れ、あらためて日本についても考えさせられましたし、海外というところまで視野が広がりました。日本国内だけにいては分からない様々なことを見たり聞いたり体験したりするという事は、日本の中での学びとは全く異なりました。また、引率して頂いた先生方との会話・ホテルでであった同年齢の日本人からも多くのことを学び、もっと広い

視野で今後の進路について考えていきたいと思いました。

・将来の海外進出は全く興味がなかったけど、一つの選択肢になった。また、これからの学生期間、頑張ろうと思えた。　就職で、海外研修のある病院に就職したいと思った。

・初めての海外だったので、日本の治安の良さしか知らない私にとって、未知の治安だったのですごく不安でした。　おもに、もしお金を盗まれたらどうしようという不安がありましたが、病院や学校の人をはじめ、ホテルの人や店員や道端で会う人など、みなさんとても親切でした。治安の悪い国で、どれだけ日本が治安がいいのかを知りたかった気持ちもありましたが、シンガポールの人の優しさを知れてとてもいい経験になりました。また、二つの病院と一つの学校に行ってみてシンガポールの医療の進みに驚きました。私はずっと、日本はアジアで一番の医療先進国だと思っていたので、日本より性能の良い機械や質の良い医療従事者がいて、いろいろ勉強になりました。今後もっと多くの国に行ってみたいなと思いました。また、今後もっといろんな国に行って、学習したいと思いました。

５）研修に対する満足度

	悪かった	どちらともいえない	よかった	大変よかった
①実施時期について			４人	３人
②期間について			３人	４人
③コースの構成について		２人	３人	２人
④研修先のスタッフの対応			３人	４人
⑤信州大学教官の対応				７人
⑥全体としての評価			３人	４人

５.学生レポート

理学療法学専攻　3 年
12M1307G　坂本百合子

シンガポールに行った感想を書く前に、まず事前の下調べでわかったことと感じたことを書いておきたい。

WHO の調査によると、シンガポールの医療水準はアジア 1 位、日本は 2 位。世界で見るとシンガポールは世界 6 位、日本は 10 位である。日本人として世界最高レベルの医療水準に誇りを持っていたが、シンガポールはそれをさらに上回っていた。

ではシンガポールはどのようにして医療の質を上げたのだろうか。もともと多民族国家だったシンガポールは、英語を基盤として中国語やマレー語、インドのヒンドゥー語などあらゆる言語とその民族がすんでおり、他民族を受け入れることにあまり抵抗感がなかった。その利点を生かし「医療ツーリズム」すなわち外国から患者を呼び込み治療のついでに観光もしてもらうという政策を国の柱に掲げた。これによって外貨を獲得し、得た利益でさらなる医療の充実を図る好循環ができている。

しかしこれを日本にそのまま当てはめ

ることができるとは私は思えない。日本に医療ツーリズムを導入することにすると、海に囲まれて単一の民族しかいない日本では、言語に関してハンデが大きい。はたして日本に英語を問題なく話せる医療者がどれくらいいるだろうか。

また、我が国では変化を嫌う傾向があることから医療ツーリズムの導入自体に反発があるとも考えられる。しかし iPS 細胞をはじめ日本の技術は世界と十分戦えるレベルであり、ソフト面・ハード面ともに医療技術の輸出という形ならもっと積極的に国の政策として掲げてもいいのではないかと思った。

次に高齢化問題である。総務省のホームページによると、今のところ高齢化率では日本が世界トップだが、韓国が追い上げていていずれ日本をこえるという。シンガポールの高齢化率は、2010 年から韓国とほぼ同じ値になっており、2050 年になってもそのままである。つまり日本もシンガポールも高齢化は同じ、でもシンガポールのほうが少しマシ、ということだ。何となく親近感を覚える話である。運命共同体、という言葉が浮かぶ。

両国とも少子高齢化対策は叫ばれているが、具体的な方針は明確には出ていない。シンガポールでは、現地に行き研修を受けてから感じたことだが、そもそもそれほど高齢化に危機感を持っているようには見えなかった。まだそれほど切羽詰った話とは考えられていないのかもしれないと思う。シンガポール政府(人民行動党)が高齢化対策として今までは任意だった範囲の保険(公的保険の一部)への強制加入の義務化や保険料の増加を検討し始めたところのようだ。

今回の研修でナンヤン工科大学とその移設先のトリニティ大学を訪れた時、大学のスタッフのかたが講義の後に日本の養老ホームをシンガポールにも作ってみたらいいと思っている、というような話になり Goh 先生と話し込んでいたことが印象に強く残っている。

このように同じ運命にある国同士で様々な情報交換や話し合いができることはとても有意義だと思い、私もそういうディスカッションに加わりたいと思った。英語力が及ばずそのときは何も喋れなくて、やっぱり日本は狭い、英語が話せるだけで自分の世界はぐんと広がるのだと思った。日本にいたら国内だけで十分だと錯覚してしまうから、大学生といういい時期にいい機会をもらったと思った。

今回の研修で見学した病院は２か所、シンガポール総合病院(SGH)と国立大学病院(NUH)だった。シンガポールの２つの病院と日本の病院で大きく違うと思ったのは、治療のための個室と心血管系に対する理学療法設備の２点である。

日本では理学療法はたいてい広い理学療法室で行われ、そこにはプラットホームやマット、平行棒、壁際にエルゴメーターやトレッドミル、ダンベルなどが置いてある。部屋が広く死角が少ない造りになっており、患者さんが転倒したりすればすぐわかるように、ということだと聞いたことがある。

対して、シンガポールの２つの病院では理学療法室の中に 20 ほどの個室が完備されていた。個室の中には一人用のプラットホームと患者用の椅子、理学療法士用の机(パソコン完備)と椅子が置いてあり、日本の病院で医師がいる診察室によく似ていた。また SGH、NUH では個室のあるエリアとは別に大きな理学療法室があり、そこではまるでジムのようにエルゴメーターや筋トレーニングの機械がずらりと並んでいた。

さらにまた別に少し離れたところで平行棒が置いてあり、日本ほど「1 つの部屋で」というのではなくある程度人目はさえぎられるようになっていた。もちろん患者さんには理学療法士がついているので転倒の心配などもない。私だったら大部屋でリハビリするよりは、恥ずかしくないし気

が散らないから個室がいいなと思った。「プライバシーに配慮する」と簡単に言うが、配慮する側からすると実はそれは難しく、配慮される側に立って「もし自分だったらどうしてほしいか」を感じるほうがわかりやすいと思った。

2つ目の心血管系の理学療法についてだが、ここでも日本がシンガポールに後れを取っている事実を垣間見た。日本では心血管系は内部障害としてくくられており、その治療で理学療法がオーダーされることはあまりない。基幹病院である信州大学附属病院でもそういえばエルゴメーター3台とトレッドミル1台くらいしか見なかったなぁと内部障害の実習を思い出した。

シンガポールのSGHでは入院患者専用の心臓リハビリテーション室が入院フロアにあり、エルゴメーターなどの機材も10台近く備えられていた。NUHでは理学療法部門の中に心臓リハビリテーション専門のチームがある。今回はそのチームの理学療法士のかたについて1対1で見学させていただく機会が得られ、内科系疾患に興味のある私にはとても有意義だった。

NUHにも心リハ専用の理学療法室があり、そこではスタッフ2人と、予めリハビリプログラムを決めている患者さんが5〜6人ほど入れ替わりで運動を行っていた。また心血管系の患者さんやそのご家族、外来、一般の健康な市民まで含めた講義もあった。私のスーパーバイザーをしてくれていた理学療法士さんが英語と中国語で進める講義は、心疾患のリスクとエクササイズの利点についてだった。講義を受けていたのは14人ほどだが、日本で積極的に病気の知識を(しかも専門家から直接)教授する病院があるだろうか…、と目を開かされる思いだった。

他にも、ホームエクササイズプログラムが持ち帰れるプリントにまとめてあって、患者さんの状態に合わせて理学療法士が回数やセットを決められる、効率のいいシステムができていた。しかし日本と同じように、医師が診断し理学療法士が処方に沿って治療をする役割分担や、理学療法士同士の質の差があるなど変わらないところもあり、両方の国がいいところは継続し悪いところはほかの国のいいところに倣って両方とも良くしていければいいなと思った。

続いて観光についても書いておきたい。

2回の週末と平日の中1日の休みを最大限に活用して様々なところに行ったが、心に残っているのはマリーナ・ベイに行った夜と、1人行動をした最後の週末だ。

木曜日夕方、地下鉄MRTのベイフロント駅を降りて、まず目に入ったのは3つのタワーと屋上でそれらをつなぐ船の形をしたサンズホテル。間近で見るとその巨大さに圧倒され、フラワーガーデンまで離れてみるとちょうど夕日を背景にしてシルエットが浮かび上がり、植物園の景色と相まってとてもきれいで、何枚も写真を撮った。夕食後はマリーナ湾の水と光のショー。ガーデン側からマリーナ湾側へサンズホテルを抜けて行ったのだが、薄闇に夜景が見事に映えて感嘆するほどきれいで…。時間が迫っていたため、引率してくださったGoh先生には焦らせてしまって本当に申し訳ないと思っているが、ときどき小走りになりながら歩いたその道中の景色が言葉では表せないほど美しかった。湾の光のショーとさらにその次のガーデンの光のショー、どちらも見に来てよかったと思った。

土曜日はシティのシンガポール国立博物館を訪れた。何が書かれているのかわからない謎の石、王が統治していた国テマセクの時代、ラッフルズ卿の上陸、自由貿易の始まり、自由貿易の始まりで衰退し海賊と化した先住民のマレー系の人々、日本の侵略…、などシンガポールにまつわる物語を読んでいくうちに(日本語の音声ガイドがある)、国境をつくり誰が国を治めていようとも、大地と人は関係なくそこにいるものなのだな、と深いところで思うことが

あった。
　そのほかにもプラナカン博物館を訪れたり、戦争記念公園に行ったり、シンガポール最大の書店で一息ついたり、リトルインディアのフードコートの雰囲気に怯んだり、日曜日にはシンガポールの西側の日本庭園・中国庭園まで足を延ばしたりと充実した週末を過ごした。
　今この時期にシンガポールに行けたことは本当に良かったと思う。

看護学専攻　３年
12M1174A　藁科亜季

　私にとって、今回のプログラムの参加は初めての海外渡航となりました。大学のプログラムということ・先進国の医療を学習することが出来るということ・シンガポールの治安が比較的良いということ・丁度よい期間であったこと、そして先生方からの様々なサポートや家族からの後押しもあったおかげで、不安もありましたが、第一回目のシンガポールのプログラムの参加を決意しました。実際に行ってみて、多くの事を感じ、学び、体験し、本当に貴重な経験をさえていただいたと思います。

　シンガポールは多民族国家であり、有名な観光地であること、そしてメディカルツーリズムという他国から医療を受けに来る人への医療提供も盛んなことからもあり、様々な国籍の方がいらっしゃいました。そのため日本人の私たちは外国人という目で見られているという感じはあまり感じませんでした。
　病院や大学を見学させていただいた際には、もちろん英語での説明でした。聞き取ることが出来る部分はありましたが、英語の授業とはまるで異なるスピードと、シンガポールならではの強い訛のある英語であるシングリッシュはとても聞き取ることが難しく、英語が苦手な私は大変でした。聞き取りやすい英語でも、医療英語が入っていたり、難しい単語が入っていたり、集中力を持続させなくてはならず、非常に大変でした。先生に通訳をしていただきながらの学習となってしまった点では、もっと英語力があればと感じるばかりで、悔しかったです。
　見学先や観光地など様々な場所で英語が飛び交っていたのはもちろんですが、私たちが宿泊したホテルでは、一般的に日本で想像するようなホテルというよりも、どちらかと言えばシェアハウスに近いようにも私は感じました。そのため、観光地やホテルでは、出身を聞かれたり、果物をいただいたり、分からないことを教えていただいたりと、沢山の人との触れ合いの場や英語に触れる機会が多くありました。
　また、自分たちだけでの行動や一人での行動では、自ら現地の人に質問することも多く、最初は躊躇していた部分が多くありましたが、慣れるにつれ積極的に交流できたように感じます。
　誰かに任せるのではなく、自ら行動する力も養われ、英語が苦手な私でも会話が出来るということを実感し、少し自信が持てるようになりました。日本人は完璧な英語が話せないとだめだと思っている人が多いという話を先生からうかがっていましたが、実際に会話をしてみて、私のつたない英語でも親切に分かりやすく説明してくださる方が多く、完璧な英語でなくても良いということを実感しました。

　海外渡航では異文化を学ぶこともできました。シンガポールはグリーンアンドクリーン運動が盛んで、チューインガムの国内への持ち込み禁止やガムの販売禁止、ＭＲＴ内での飲食禁止、ごみのポイ捨て・道路でのつばの吐き捨て・トイレで水を流さない・横断歩道に関する罰金など、徹底した環境面への配慮がなされていました。
　また、事前学習で学んだシンガポールの文化や歴史、医療・介護・保険の制度など、海外渡航前にその国について学習することは大きな知識として身につくと感じま

した。
　街並みの中にも、多民族国家ならではの宗教や習慣への配慮がみられました。寺院やモスクでは礼拝をする方々の姿も見られ、観光客が中を見学することが出来たことに驚きました。中には実際に礼拝しておられる方がいらっしゃったり、礼拝の時間が表示されていたりと、それぞれの文化を尊重し、多民族の人に理解してもらえるような配慮もなされているように感じました。
　その他、待ち時間に海外や将来について先生からの学びがあったり、同じくプログラムに参加した海外渡航経験のある仲間から食文化や空港でのことについて学んだり、ホテルで出会った同年齢の日本人女性から人生設計について考えさせられたりと、多くの事を学ぶことが出来ました。他国の文化を学ぶだけではなく、日本について考えさせられる場面も多くありました。
　シンガポールの良い面があった一方、フードコートの衛生面や、飲食店でのお水が有料であること、野菜が十分でない食文化、接客など、日本と比較してしまうことも多く、日本の細かな配慮・礼儀といった文化の素晴らしさ・いかに自分たちが恵まれた環境なのかも改めて実感することが出来ました。

　そして、シンガポールの医療・教育の現場では、敷地面積の広さに圧倒されたことから始まり、最先端の医療技術・教育システムに驚かされたことが沢山ありました。特に私が驚いたものの一つに、シミュレーションがありました。
　個人の技術や能力向上、リーダーシップ・チームワーク・コミュニケーション力・役割分担などのチーム力を向上させる練習のために、シナリオをつくり、どんな患者設定でも対応できるようなシステムがありました。そのマネキンはバイタルサインの確認ができる他、瞬きをし、心音・呼吸音・腸蠕動音までも聴取でき、コミュニケーションもとることが出来ました。
　さらにそれは病院内のみならず、大学にもあり、学生たちはそのシミュレーションシステムを用いていつでも練習することが出来るようになっていました。

　二つ目に、徹底した安全管理や感染防御といった患者への最高の医療提供が出来る環境づくりがありました。
　安全管理の面では、患者の転倒予防評価としてベッドにタグをつけて、誰でも注意することが出来るようになっていたり、服薬管理として厳重な機器管理がなされていたりしました。
　感染防御の面では、サーズが流行した時から始まったというゲートがあり、病棟内に感染症を持ち込ませないという工夫がなされていました。
　産科・婦人科病棟では、母親と赤ちゃんの間違いを防ぐためにそれぞれのＩＤカードが合致すると音楽が鳴ったり、赤ちゃんが誘拐されたりしないように外へ連れて行こうとするとアラームが鳴るようなシステムが装備されていたり、イスラム教徒の方の胎盤処理方法を間違えないようにするためのボードがあるなどの、数々の工夫がありました。

　三つ目に、質の高い医療提供のための工夫がありました。例えば、スタッフの表彰や病室のクラス分けというものがありました。
　スタッフ表彰では、患者・患者家族などが提供された医療について評価し、病棟・チーム・個人などにそのデータが渡されたり表彰されたりしていました。病室のクラス分けは、Ａ・B_1・B_2・Ｃなどに病室が分けられており、それぞれ100％から20％までの支払い料金の設定になっており、それぞれ家計の負担を考慮され、提供するサービスなどが異なっていました。
　その他に私たちが驚いたことに、スタッフ用のジムや外来が病院内に存在しているということがありました。スタッフのみ

が使用できるもので、自分の健康を維持した上で患者さんに医療を提供しようという考えが表れていました。私たちを案内してくださった病院のコーディネーターの方々には、広い病院内の案内や病棟との連絡をこまめにしていただき、それも医療提供の場面では欠かせない気配りだと感じました。

今回のプログラムに参加させていただいたことは私にとって大きな財産となりました。これまで海外渡航の経験がある人からの話はたくさん聞いてきましたが、やはり実際に行ってみて、体感してこなければ分からないことが沢山ありましたし、いくら聞いても実際に体験してみなくては身につかないと思いました。そして海外へ行ってみて、受け身ではだめだということ・最初からできないと決めつけずに挑戦してみること・もっと広い視野で物事をとらえて生活していかなくてはいけないということを痛感しました。

自分で行動・主張する力が弱いと言われる日本人の中で暮らしているとあまり実感はありませんでしたが、少しずつ積極的になって行動できるようになり、より多くの事も学習できるということが分かりました。

事前学習を行っていたことは良かったですが、英語について、今回もっと英語力が身についていれば、もっと有意義なプログラムになっていたと思いました。

海外渡航は日本についても他国についても多くを学習でき、考えさせられます。「海外に行くと視野が広がる」という話は、やはり本当だと感じました。治安が良いとはいえ、何事もなく帰ってくることが出来たことや異国の文化・習慣・価値観・医療や教育現場などから多くの学びを得ることが出来たことは、先生方の御指導や準備そして、私たちが出会った方々にも恵まれたことが大きかったです。今回の貴重な体験をさせていただいた事への感謝を忘れず、そして今回の学びを今後の自分の人生設計や学習にも役立てていきたいと思います。

以上、シンガポール夏期短期プログラム

【編集後記に代えて　国際交流委員会委員長】

今年で 13 回目のカーティン大学短期留学、初回のネパール短期研修プログラム、シンガポール短期研修プログラムが終了しました。

カーティン大学では 3 週間、ネパールとシンガポールは約 1 週間、学生たちは多くの体験をし、一回り大きくなって帰ってきました。「百聞は一見に如かず」といいますが、海外での異文化体験は大きな学びとなり、彼らの今後の成長の糧となっていると思います。

カーティン大学、信州大学国際交流室、医学部長、保健学科長、保健学科同窓会、帯同教員と国際交流委員、そして保護者の皆様のご協力に対し、あらためて心より深く御礼申し上げます。

（国際交流委員会　委員長　奥野ひろみ）

：：：